終わりのないカルテット

00Cadirac com.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
終わりのないカルテット

【Ｎコード】
Ｎ１６７６Ｖ

【作者名】
００Ｃａｄｉｒａｃ　ｃｏｍ

【あらすじ】
【ソングテリング【ｓｏｎｇ－ｔｅｌｌｉｎｇ】とは。

ソングテリングというのは、歌と小説とのリンクを使った表現手法のことです。

歌があります。

文学的な比喩ではなく、現実に存在する歌です。

ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｍｙｓｐａｃｅ．ｃｏｍ／１００４８９９０４５

この物語とリンクする、歌、が現実に存在し、そのバンドの名前を。

終わりのないカルテット。といいます。

すべての歌に、謎がある。

歌に込められた意味が、小説の物語の中で明かされたり、いなされたり、絡み合ったりします。そしてやがて、歌と小説が互いに干渉し合いながら、表現媒体の枠を越えて果てしなく広がっていきます。

ソングテリングは歌と小説とのリンク。

それを、インターネットという仮想現実サイドを使って、さらに広げていきます。

そして。

現実にフロアで鳴らされる音楽が。

音楽こそがそれらすべてを抱え切る大きな器です。

虚構はやがて現実を侵食し、あなたの現実を後ろから撃ち抜きます。

そういうことです。

ほら　あなたの後ろに

◆平日早朝更新◆

HP
http://x74.peps.jp/owarinonaiqt

青林檎

「鍵があるんだ」

「かぎ？」

「そう。その鍵は神様みたいなものだって。じいちゃんが」

「鍵が神様ー？」

「そう」

「へんなの」

「その鍵は、使うとすべてを無に還すんだって。
だから誰だろうと、決して使っちゃいけないんだって」

「あっ」

「危ない！ちゃんと押さえろよ！」

「ごめんごめん」

「ほら、そこにつかまれ」

「よいしょ」

「よし」

「むにかえす、って何？」

「みんな消えちゃうってこと。おれもお前も、じいちゃんも、りんごの畑も、シュバルツおじさんのお店も、この街も、ぜんぶ」

「みんな消えちゃうのか」

「だって」

「むにかえす、になって、消えたら、僕たち、どうなるのかな」

「うーん」

「まっくらかな」

「真っ暗だよ。きっと流星仮面も、ジャングルマスクも、もう二度と見れない」

「えー！」

「だからまずいんだよ」

「そんな鍵つかわないよ」

「だな」

「すごい！たくさんだ」

「今年は豊作なんだぞ。ほら、そっちのが一番新鮮なやつ。あけて

み」

「よいしょ」

「どう」

「わあ！真っ赤だ。大きくて綺麗なりんごだ！」

「噛じっていいよ」

「やった」

「ばれないように、2、3個だけだぞ」

しゃくっ。

「甘い！いいりんごだ！」

「おれはこっち」

「えー」

「こっちも甘いぞ」

「うそだー。青いじゃん。まだ早いやつだ」

「これは青林檎。熟してないわけじゃないんだぞ」

しゃくっ。

「うん、甘い。ほら、試してみろよ。綺麗な青だろう」

「ほんとだ。綺麗な青だ」

しゃくっ。

「どう」

「甘いー！」

「だろ」

「すごいね。こんなに青いのに。青いりんごが甘い！おいしい！」

すんすん。

「それに、いいにおいだ」

「香りがいいのが青林檎のとくちょうだ。でも」

「でも？」

「うん。この青林檎は今年で終わりだ」

「ええ！どうして？こんなにおいしいのに」

「色が」

「色？」

「青いから売れないんだ」

「あ」

「今お前が言ったみたいにみんなすっぱいと思うんだよ。だから」

「だからか」

「だからだ」

「そうか」

「うん」

「ざんねんだ」

「仕方ないよ」

「ごめん」

「いいんだ。来年からうちの畑は本当に真っ赤っかさ」

しゃくっ。

「でも！赤いりんごだっておいしいよ！」

「うん」

「綺麗だし！」

「うん。大丈夫。おれは赤い林檎も大好きだ」

しゃくっ。

「おれはこの赤い林檎を大切に育てる」

「うん…」

「絶対」

「うん」

「あ」

「音」

「じいちゃんだ。やばい、鍵閉められる！」

「神様？」

「ちがう。普通の、出られなくなる鍵、だ！急げ」

「むにかえす！」

「ちがうって！ほら早く登れ！」

「ジャングルマスク！」

名前－Q1－

エレベーターを降りて、ガラス越しに中を覗いた。

整然と立ち並んだデスクの上で、パソコンのディスプレイが明滅している。

薄暗いガラス張りの大部屋だ。青く冷たい光が反射する、最上階のメインフロア。深夜二時過ぎの無人のフロア。トレーディングルームの奥にあるシークレットブースは、ドアが閉まりきっていない。中から声が聞こえる。

「あんた、本気なのか？」

「本気さ。では逆に君に問おう。あの会社は社会的に見て、善か、悪か？」

足音を忍ばせて、入口に歩み寄る。トレーディングルームのドア。耳を澄ます。

「分かりますよ。間違いなく今回の事態を引き起こしたのは、彼らのような会社が主に扱っている例の投機商品が原因だ。けれどもあの会社が倒れたら」

「世界経済は大混乱になるだろう。だがそれは報いだよ。人間にとって本当に必要な、実体のあるモノの価値を軽んじた結果だ。あの手の会社だけでなく、金融という、本来社会の脇役であるべき分野が傲慢にも世界を牛耳った気になって、猫も杓子も、実価値を生み出すことのない抽象的なマネーゲームにのめり込んだ、これは、報

いだよ」

「あんたは」

入口の壁は高級な大理石だ。冷たい壁。その陰に身を潜めて聞き耳を立てる。

「あんたはスロスの弟子だ。あんたの言う、そのマネーゲームの、ファンドビジネスの、あんたはその第一人者だろう」

「その通り。私は金融工学と世界経済、市場についてのあらゆる知識を身につけ、実際に苛烈な修羅場をくぐり抜けて、市場の勝者として君臨してきた。そしてその本当の目的は」

デスクの書類を物色する音がした。声が掻き消されかける。慌てて、半分開いたドアの隙間から、トレーディングルームの中に体を滑り込ませる。

「そんな馬鹿な…」

「馬鹿な話など何もないさ。使者なんだ。私はその為に遣わされた使者にすぎない。私の人生はすべてその仕事を果たす為だけにあるのだよ」

「ではスロスがすべてを計画し、あんたを育て、使者として遣わしたというのか」

靴音が響き、革のチェアーが軋んだ。

「勘違いしてもらっては困るな。私にとってスロスは単に知識を検

索し吸い上げる為のインターネットのようなものにすぎない。私たちを遣わしたのは」

「　　」

戦慄した。かいていた汗が引いた。足腰がくだけた。唇を震わせながら、聞き耳を立て、見つからずに部屋を出るタイミングを計る。心臓が早鐘を打つ。呼吸が乱れる。

「これを知ってしまった君は、自分がどうなると想像するかね」

デスクと椅子がぶつかり合う音がした。空気が張り詰める。

「Ｍｒ．…プレジデント、サカグチ…あんた…」

「それは仮の名前だよ。すでにその名前の方が有名になってしまったがね。ここで生きる私の、本当の名前は

名前ー０２ー

「コンビニに電子マネーが最初に導入されたのはいつですか」

「２００１年」

「例の電子マネーは、ある優れたＩＣチップの開発によってはじめて可能になりました。そのチップを開発したのは」

「ソニーだ」

「ＩＣチップの名前は」

「ＦｅｌｉＣａ」

「その後その電子マネーは数多あるコンビニで次々と導入されていきました。しかし、２００８年時点で未だにそれを導入していないコンビニチェーンがありました。それはどこでしょうか」

「セブンイレブン」

「それは何故ですか」

「セブンイレブンは自社独自の電子マネーを扱っていたから」

「その通りです。しかし、そのセブンイレブンも翌年には結局例の電子マネーの導入を決定します。何故でしょうか」

「おそらくセブンイレブンは考え方を変え、電子マネー使用者全体

の広がりを目指したんだ」

「そうです。それで例の電子マネーですが、そのネーミングにはある願いが込められていました。何でしょう」

「世界経済において、第四の基軸通貨になること」

「その心は」

「頭文字が示している。隠した言葉は、Ｅｕｒｏ　Ｄｏｌｌａｒ　Ｙｅｎ　だ」

「その通りです。では最後に聞きましょう」

「はい」

「その電子マネーの名称は

記憶

耳に入ってくる音が増えた気がする。

自転車の回る音。子供の声。商店街の喧騒。
柔らかい陽射しがたまる4月の午後だ。町を歩いて感じるものは、
新しい何かをはじめようと動き出すエネルギーに充ちているように
思えた。

彼は冬用のミリタリーコートのポケットに両手を突っ込んだ。
ドラッグストアの角を曲がり、足を速めた。

まだ気温は少し低い。道路の脇に泥まみれの雪が残っている。だが
鼻に触れる空気はもう、春だ。

ハザードを点けて停車している車の横を抜けて、狭い道路を横断した。
コンビニの前で立ち止まり、携帯を確認する。

無表情で、携帯にせわしなく親指を這わせる。人差し指の付け根に
小さな鳥の入れ墨。
少し考える。また指を走らせる。納得して手の中の携帯電話を数秒
見つめた後、また歩き出した。

ポケットの中で液晶のライトの光がまだ残っている。
受信ボックスの一番上のメッセージ。

RE：例の件

確認がとれたよ。やっぱり本当みたい

六畳一間の築２０年。古いが、構わない。快適だ。やかんに火をかけながら少し考える。立ち尽くす。
足元には本が無造作に置かれている。自動車関係の本が多い。その隙間には書きかけの履歴書。しばらく放置されたままで、汚れて折れ曲がっている。

火を止めた。そしてポケットから携帯電話を取り出す。折りたたみを開いてディスプレイに明かりをつける。
メニュー画面からデータフォルダに入る。画像データをクリック。最新のものが一番上にある。そこから下へスクロールさせる。徐々に古いものへ。

２０１０／７／１９。鮮やかな緑色を背景に数人の男女がこちらを向いている。
去年行った金山湖のキャンプだ。構わず下へスクロールさせる。表示はさらに古いデータへ。
指を止める。２００９年に切り替わった。ひとつの画像を選ぶ。クリックして拡大表示させる。

２００９／１１／０４。やや暗い画像だ。
機械の駆動部分のようなものが映っている。何かのシャフトとそれ

を固定するボルト。
ボルトはシャフトを貫くように二つ留まっていて、その隣に、もう一つ穴がある。
ボルトの背には小さな文字で規格とマークが彫り込まれている。二つのボルトの片方にはｍａｄｅ　ｉｎ　ｊａｐａｎの文字。隣のボルトは、ｍａｄｅ　ｉｎ　ｃｈｉｎａ、だ。

画面をしばらく見つめる。何かを思う。それから首を横に振り、もう終わったことだとディスプレイ画面に戻し、携帯の折りたたみを閉じた。

検証

「また死ななかったのか」

「はい。全身打撲で動けなくされる例の一連の手口ですが、今回もとどめの一撃が刺されていません」

「ふん」

「そしてやはり現場には」

「またか」

「はい。４という数字が赤い油絵の具で、地面に」

「４か」

「こちらです」

すでに救急車で運ばれた被害者の血痕のそばに、油絵の具のぎらついた分厚い質感で、「４」の数字が残されている。髭面の刑事はしゃがみ込み、薄手袋をはめた中指でその４をなぞった。

「最初の三人はとどめを刺されて死んだ。現場に４のサインはなかった」

「はい」

「そして４人目以降の被害者は死んでいない。激しい暴行を受けてはいるものの、被害者は殺されず」

「現場にはこのサインが」

「犯行を妨害している人間がいるとしか考えられないだろう」

「ではやはり、この４のサインを残した人間が殺人犯の犯行を阻止しているということでしょうか」

「状況だけを見るとそうなるんだが」

「はい」

「おかしいだろう」

「何ですか」

「いいか。仮にこの殺人犯の犯行を妨害している何者かをＸとしよう。何故Ｘは犯人を野放しにするんだ」

「野放し」

「殺人が実際に遂行に至った最初の三件を含めて、同一犯だと考えられる一連の事件は、ここまで全部で何件だ」

「九件です」

「つまり、Ｘに犯人を捕まえる意思があるのならば。Ｘは最低六回は犯人を取り逃がしているわけだ」

「あ」

「Xは優秀だぞ。行動を開始した四度目の事件を最初として、ここまで、犯行阻止成功率１００％だ」

「まるで犯行のすべてを知っているかのようです」

「そうだ。だからそのこと自体も充分に奇妙なんだが」

「そんなXが」

「そう。犯人を何故逃がす？捕まえろよ。撃退しろよ。通報でもいい。どうしてこんな中途半端なことを繰り返すんだ」

彼

「環境だよ」

「ああ」

頭の中に声が響いた。
知らない声だ。

「まず最初に重要なことは、僕達がその環境に適応できるかどうかってことだ」

足元を見た。床。金属的だが金属特有の威圧的なところのない、柔らかい風合いのフロア。研究所？あるいは何かの工場か。分からない。状況が掴めない。記憶を手繰る。

「うんざりするくらいシミュレーションしてきたんだ。大丈夫だろう」

キーボードを叩く音。

「いえ。彼の言う通りよ。私達は、最善を尽くさなければならない」

何処だ。ここは。

知らない声が行き交う。
顔を上げる。
両壁は鈍いオフホワイト。何かの電気系統が露出しており、白い布で巻かれたバルブが等間隔で設置されている。

「どうだ」

「きました」

モニター画面が切り替わった。室内の半分ほどもある、巨大なモニター画面に砂漠が広がった。黄色い砂漠に、奇妙な形をした岩が無数に点在している。

「空気の組成、紫外線の量、共に問題ないです。そして我々は最も緩やかな気候のポイントに着陸したはずです」

奇妙な岩が林立する黄色い砂漠の向こうには緑色の茂みが広がっている。その向こうには、海。

「どうします」

キーボードを叩いていた男がこちらを振り返った。

「ちなみにもうマウスは残っていません」

モニターに目をやる。砂漠と海の美しい風景。

「まず俺が降りよう。３０分経っても俺の生体信号に異常がなかったら、さらに順番に３０分毎に一人ずつ降りてこい」

「いいな」

全員の顔を見る。

「了解」

みんながこっちを見た。全員何かの作業服のようなものを着ている。つやのある白い作業服。消防士か。いや、昔テレビで見たＮＡＳＡの隊員みたいだ。

「一応」

一番東洋的な顔立ちの女が声をかけてきた。

「気をつけて」

男は右手をかざした。
それを返事の代わりにして、視界が転回した。
振り向いて、非常口。
狭い通路に入った。鉄の階段を降りてゆく。金属が響き渡る足音。
彼は降りてゆく。

彼は。

彼が。

いや、僕が？

階段を下りると扉があった。バルブを捻った。さっきより一回り小さい金属の扉が開いた。異常に分厚い扉だ。開いた扉の奥に膜のようなものがある。黒いゴム製の膜だ。植物の花びらのように何枚かに分割されている。その巾着袋のようにすぼまった真ん中の部分に体を押し込む。

ゴム製の膜を通過した奥には、何もない、シンプルで広々とした長い通路があった。飛行機に搭乗する時の連絡通路みたいだ。

何かガスが噴き出るような音がして、後ろの扉が閉まった。激しい音が通路内に響き渡る。それに構わず立ち止まってカードリーダーに認証カードを入れると、デジタルの数字が表示され、カウントダウンが始まった。ガスが噴き出るような音が次第に継続的で静かなものになり、そのまま安定した。どうやら密閉された室内の気圧が下げられているみたいだ。
いよいよ外へ出る。

彼が。

僕が？

―まず最初に重要なことは、僕達がその環境に適応できるかどうかってことだ―

激しいガスの音がして、最後の扉が開いた。

ゆるされた星

「この星はあげる」

「やった。じゃあシリウスはぼくのほしね」

「カペラは？」

「わたしはスピカが欲しいな」

「ほら。じゃあスピカはお前にあげるよ」

「ふふ、きれい。代わりにカペラをあげる」

「よし」

「ん？これは」

「うわ。まぶしい！ペテルギウスだ」

「すごい明るい！」

「ああもう！このまぶしいの、だれか、いる？」

「はいはい！ぼくもらう」

「んっ。早くポケットにしまえよ」

「やった」

「これはなあに？」

「んー。あんまりきれいじゃないね。なんだろう」

「どれ？」

「これ」

「ああ。それはゆるされた星だよ」

「ゆるされたほし？」

「そう。おれたちが住むことのできる星」

「すめるの？ここみたく？」

「ほら。やさしい色だろ。こういう星がこのうちゅうにはまだあるんだってさ」

「へええ。いいなあ」

「なかでも、はすむかいの銀河にあるゆるされた星は青くてとてもきれいなんだって」

「ぎゃあ。ぎんがなんてとおすぎるよ」

「いつか行けるときは来るのかな」

「きっと来るさ」

「この星はなんて名前?」

「この星はたしか…」

陰性

柔らかい眠気が続いている。

その眠気は、春になって暖かくなってきた頃に訪れる、あの、目の眩むような誘うような眠気ではなく、薄い幕で覆った電球のような、見つめ続けることができる程度の緩やかで優しい眠気だ。だが、細く長く、持続している。

水曜日の午前だ。もう１０時半を回っている。

目が覚めると、二階の自分の部屋を出て一階の台所へ向かう。そこで冷蔵庫の中を物色するのが僕の日課だ。

今日はカツゲンがある。それにカットチーズ。電子レンジの横に食パンがあったから、今日の朝食はこれでいい。

一昨日見た夢の余韻がまだ残っている。宇宙船の中にいる夢だ。非現実的で不思議なシチュエーションなのに、奇妙にリアリティを感じた。五感にかなり具体的な感覚があったような気がする。そしてあれは、どこかで見たことのある光景だったような。

銀紙を破いて黄色いチーズにかぶりつく。口の中にそのかけらを残したまま、食パンをかじる。

今日もこのまま何もしないだろう。

平日の昼間だ。家族は皆、仕事に出掛けている。父は小さな工務店の大工、母は区民センターの図書室で事務、それに弟は携帯会社のコールセンターだ。

僕はすでに二年間、引きこもりを続けている。当時の彼女に勧められて何年間か資格試験の勉強をしてみたけれど、途中で馬鹿らしくなってやめた。結局受からなかったのだから馬鹿らしいも何もないのだが、とにかくそういう風に思考操作をして、今に到る。

どんなにやる気を起こしたって、僕ごときの人生で何か大したことができるわけがない。贅沢なんて求めないから、世界も僕に構うな。抵抗なんてしない。時がきたら自然に静かに死んでいくから誰も僕に干渉しないでくれ。それが僕の正直な気持ちだ。

リモコンの電源を押してテレビをつけた。

今風の薄型の液晶テレビだ。画面に男女のニュースキャスターが映った。昨日の夕方の放送の録画。

テレビはあまり観ない。観る側に主導権がなく、一方的に情報を垂れ流してくるところが性に合わないのだ。僕の人生にはテレビは必要ない。というか、あってもなくてもいいものだ。
画面を漫然と眺める。

…となり、これで札幌市内における、同様の手口による被害者は３件目、日本全国では１４件にのぼります。尚、被害者は激しい殴打を受けた上、何らかの薬品を投与されており、警察ではその薬品について調べていますが、今のところまだ特定には至っていないということです。それでは次のニュース…

最近噂の、４の事件だ。老若男女、誰彼構わず、ボコボコにされて、

いろんな場所に適当に放置される。被害者はいつからか殺されなくなった。

奇妙な事件だ。

何故、犯人は標的を殺さなくなったのだろう。
事件がニュースになり始めた最初の頃は、確か何人か死んだはずだ。

殺すのはさすがにやり過ぎだったと反省したのだろうか。
一瞬考えて、小さくかぶりを振る。そんな馬鹿な。
犯人は毎回、４という数字のサインを残すそうだ。

４。

死ね、の４か。いや、殺さなくなったんだからそれは違うだろう。
じゃあ、死ぬな？死なない？いや、だったら最初から瀕死の重傷なんて負わせるなよ。
それとも、まったく別な意味があるのだろうか。やっぱり変だ。さっぱり意味不明。

どうでもいい。こんな事件。話に進展があった時にだけ教えてくれ。
リモコンを弄って別な番組に切り替える。

やはり今日は少しどこかへ出掛けてみようか。
そういえばＮｉｎｅｉｎｃｈＮａｉｌｓの新譜が出ていたはずだ。
いや、違う。映画のサントラだったか。
とにかくタワーレコードに行こう。引きこもりとは言っても、近所に散歩くらいはするのだ。カジュアルな引きこもり。

僕は、食パンと６Ｐチーズをカツゲンで流し込んだ。

今日は天気がいい。さあ諦めた人間の清々しい一日を始めよう。

陰性症状というらしい。

幻覚を見たり、妄想や、あるいは錯乱などの、どちらかと言うと積極的な匂いのする症状を、陽性症状という。それに対して、例えば引きこもりや感情鈍麻といった、内側に向かう感じの、症状としては比較的地味な部類のものを、陰性症状というのだそうだ。

半年前から薬を飲んでいる。
家に閉じこもる生活を始めてから一年間は、まったく外へ出られなかった。家族には、最初は単に人生にふて腐れて部屋にこもる怠けた奴だと思われていたみたいだ。だが、無理矢理外へ連れ出される段になって、激しく痙攣を起こし、嘔吐し、全身が真っ青に冷たくなった僕を目の当たりにして、何かの病気だと認識したようだ。

地下鉄の階段を下りてゆく。

この独特の、冷えた空気の感じは悪くない。

必ず壁際を歩く。常に背中を壁に向けるようにする。視界を完全に保つ為だ。見えない後ろに人が立つとよくないことが起こるのは、すでに経験で学習済みだ。要するに、不安緊張による動悸、発作を起こし、時に人に迷惑をかける。

病院には、半年前に初めて行った。

そこで、僕は引きこもり傾向のある陰性症状だという診断が下され、リスペリドンという薬が処方された。

鬱病とか精神性の疾患ではいつも、ドーパミンだとかセロトニンだとかの脳内分泌物がよくキーワードになるのだが、リスペリドンはセロトニンに強く作用する薬らしい。

とにかく僕はそれを毎日服用している。おかげで今日も、それなりになら外出のできるライトな引きこもりとして、日々の暮らしを楽しむことが出来ているわけだ。

券売所で切符を買う。本来ならば、毎回小銭を出していちいち切符を買うよりも、使用限度高めのウィズユーカードを一度買って、それを使って毎回改札を済ます方がはるかに効率的かつ経済的なのだが、僕は使わない。

僕はウィズユーカードを使わない。何故か。行動を限定されるからだ。例えば５０００円のカードを買う。それはつまり５０００円の金銭の使い道を、ある一定の未来までウィズユーカード、つまり公共交通機関使用費に決定的に支配されることを意味する。

行動を強制されることを僕は嫌悪する。僕は自由の国の妖精だ。

改札を通り抜けて、エスカレーターからホームに降りてきた。
さて、これから車輌に乗る。人の多い車輌内は僕にとって少しハードルの高い場面だ。壁を背にすることのできる、最前車輌か、あるいは最後尾の車輌が僕の定位置だ。

アナウンスが流れる。

間もなく、福住行き、列車が到着します。白線より内側に下がって、お待ちください

ふらりふらり、人が待合線の近くに集まってゆく。柱を背にしてもたれて立っている僕は、それらの人々をすべて見届けた後、乗降口に近づく。

走行路の、真っ暗な闇の奥に、光が見えた。

それから数秒待っていると、揺れる金属音を上げながら、クリーム色に光る車体が姿を見せた。

ホームに入り込んできた車輌は、乗降口との間合いをとる為に、ゆっくりとやや前方へ進み、それから、ぎりりと音を立てて停車した。

排気音がして、スライド式の乗降口が開いた。この駅に降りる人を真ん中から先に通した後、待っていた人々が左右脇から乗り込み始める。

少々心拍数が上がっている。だが大丈夫だ。人々は僕のことなど見ていない。僕も人々を見ない。さあ、車輌に乗り込もう。

僕の世界には僕一人だ。

欠陥

人差し指の付け根に小さな鳥の入れ墨がある。

携帯を開き、そしてまた閉じた。誰かを待っているらしいその男は、ストローに口をつけて小さく中身を含んだ。

「おお。早いな」

悪びれる様子もなく現れたもうひとりの男は、そのまま向かいの席に体を押し込んだ。今は2時42分。約束の時間は2時ちょうどだから、男はすでに40分の遅刻をしていた。
先に待っていた細身の男は、遅刻した男を無言で見つめた。

「そういう顔をすんなって。実は」

細身の男は、かすかすになったポテトのかけらを口に入れた。

「カブトムシの止まり木に粘菌が生まれたんだ」

細身の男は遅刻の男を見つめたまま、無反応でポテトを咀嚼している。

「笑えばいいのか」

「だめか」

「よく分かんねえよ」

遅刻の男は、ドリンクの蓋を外して素手で中の氷を摘み上げ、それを口に入れて噛み砕いた。それを頬張ったまま、遅刻の男は細身の男を見る。二人はそのまま顔を見合わせる。
遅刻の男は頬をぷくっと膨らませた。細身の男は目を閉じて、鼻で笑うようにため息をついた。

「もういいよ。それで？」

「よしよしよし。そうこなくっちゃ」

遅刻の男は、肩を回すようにしてさりげなく周囲を確認した。

「さて、本題だ。ともかく例の話は本当だぞ」

「ネクサスか」

「ああ。ネクサスは本当にやばい。不具合についての問い合わせがすでに相当数きてるらしい」

細身の男は一瞬止まるような素振りを見せた。それからふっと肩の力を抜いた。

「僕らのせいだろう」

向かいの男はタバコに火を点けた。

「そうさ。俺らは気づいてたんだからな。だから俺らは工場長に上申した」

「けれど僕らは」

「そう。辞めさせられた」

細身の男は飲み残しのドリンクを啜った。氷の擦れ合う音が響く。

「派遣社員の末端だからね。仕方がないよ」

「だが、不正を隠す為だぞ」

「隠す」

「ああ。シノダはこの件に関して、隠したまま乗り切るつもりみたいだ」

細身の男は、呆れるとも怒りともつかぬ狼狽した表情を見せた。

「ステアリングシャフトだぞ」

「そうだ」

「ハンドルの欠陥だぞ」

「そうだ」

「リコール隠しか」

「どう思う」

細身の男は目を閉じて首を横に振った。

「正気なのか」

「欠陥について知り得る環境にあった奴のほとんどが昨年度の契約期間で更新を打ち切られてる」

細身の男は、湧き上がってきた感情を押さえ込むようにドリンクのカップを掴み、浅く呼吸をした。

「当然」

遅刻の男は、タバコをふかして煙を吐き出した。

「うん」

「僕は当然真っ当なやり方で解決されるものだと思ってた」

遅刻の男は、蓋が外れたドリンクをストローを使わずに飲み、喉を鳴らした。手首で口を拭う。

「シノダの車に欠陥があるはずがない」

「なに」

「と信じきっている人間が上の方にも本当にいるからな」

細身の男は、目の前の男から視線を外して、何かを考えるように厳しく目を細めた。そして、それからもう一度、しっかりと自分の友人を見据えた。

「告発するべきなんじゃないのか」

「そう思うか」

「僕達が組み上げた車も入っているんだ。気づいていた欠陥で事故なんて」

「許せないだろう」

「どうにかしたい」

「そう言ってくれると思ってた。だからお前に話したんだ」

二人が座っている席の足元を子供が通り抜けた。はしゃいだ子供の後ろをトレーを持った母親が続く。二人は一瞬沈黙する。

「だからって、どうするんだ」

遅刻の男はタバコの先端に溜まった灰を、灰皿の角に落とした。

「アメリカのＲＭがな」

細身の男は目を向けた。

「ＲＭ。ロイヤルモーターズか」

「そう、それだ。世界三大自動車メーカーの一つのＲＭだ」

遅刻の男がタバコをくわえる。

「ＲＭがどうした」

外して男は煙を吐いた。
細身の男は目で促す。

「排ガス規制で経営不振だ」

「排ガス規制か」

「そう。地球温暖化対策の一環として、民主党が昨年の秋に通した法案が、かなり手厳しい」

「RMはエコカーに弱いのか」

「弱い。RMは、CO2の増加が地球温暖化に寄与している、という考え方にこれまで徹底して懐疑的な立場を貫いてきた会社だ。はっきり言ってエコカーに関しては三流だ」

細身の男は、意外であるといった風に口を尖らせて頷いた。何かを考える。そして、不意に目をむいた。

「ちょっと待て」

「何だ」

「RMに情報をリークするつもりか」

「必ず食いつくはずだ」

「だめだ」

「ＲＭの環境意識の低さが気に喰わないか」

「当たり前だ」

「別な会社を探すか」

「そういう問題じゃない。日本企業を外国に潰させるような真似はできない。僕だって元シノダ社員だ」

遅刻の男は不満げにタバコを燻らせた。そして喫い切ったそれを揉み消す。

「だが、現実的に効果的な影響を与えるには大きな力が必要だぞ」

「真っ当なやり方を考える」

「どうするんだ」

「すぐには分からないよ」

遅刻の男は口を閉ざした。一瞬ふてくされた表情をする。
そしてそれから目の前にいる自分の友人の甘さを許すように笑みを浮かべた。

「とにかくやる気はあるんだな」

「ある」

「なら方法を考えてみてくれ。三日後に、ここで、同じ時間に会おう」

最後に一口ドリンクに口をつけて、男は立ち上がった。トレーを持って立ち去りかける。細身の男が声をかけた。

「遅れるなよ」

遅刻の男は顔にくしゃっと皺を寄せて、冗談っぽく歯を向いた。

ストーン

ヘッドフォンを外した。

今期の洋楽ロックの新譜はいまいちだ。

試聴機には三枚のCDが入るようになっていて、本体の横にヘッドフォンを掛けるフックが付いている。その金属のフックにヘッドフォンを戻して僕は、隣のR&Bの試聴機に移動する。

CDショップに来ると、洋楽邦楽問わず試聴機を一通りチェックする。飽き性なので、時期によって好みがよく変わるのだが、ここしばらくは明らかに日本のロック、それもインディーズの、特に未熟で生々しい感じのするものに偏っている。

男と目が合った。ジーンズ生地の無難なダンガリーシャツを小物使いで大人っぽくハイセンスに着こなしたレゲエ系。

僕は男に正面から向き合ってしまい、動揺した。萎縮して硬直し、動悸が過剰に高まる。壁際に身を寄せようとしたが、口元が引き攣って、無様な苦笑いが出た。

「あ、ど」

男は一瞬少し面倒臭そうに顔を顰め、軽く鼻で笑うように、それでも上手く避けてくれた。僕はそのまま壁際にしばらく留まり、目を閉じて深呼吸した。ポケットの中を探る。大丈夫。何かあったら薬も持っている。

ブラウン管の画面にＰＶが流れている。
派手なポップで飾られたディスプレイを横目に、僕はそのまま、洋楽の売り場の奥の方へ歩く。

売り場の奥には、ハウスやテクノ、クラブミュージックなどが配置されている。この手の音楽は歌がなく、ビートとフレーズが果てしなく反復するので、それが素晴らしいものであれば、完全に無心になれる。僕の目的はエレクトロニカのコーナーだ。

だが、先客がいた。
他の試聴機は空いてるのに、エレクトロニカだけが使用中だ。
僕は仕方なくその周辺の売り場をぶらぶらしながら試聴機が空くのを待つことにした。他のコーナーは適当に流しても、僕はエレクトロニカだけは毎回チェックしていた。自分の中では流行り廃りがなく、安定的に好きなジャンルだ。

ディスプレイではなく、ラックに無数に設置された洋楽ＣＤを、アルファベット順に一通り物色して、もう一度試聴機のところに戻ると、先客はまだヘッドフォンをかけて聴き入っていた。

先客は、ヘッドフォンを両手で押さえながら、自分の思考の内側に落ち込むように、目を閉じて音に聴き入っている。毛糸の帽子をかぶり、オリーブ色の、ロングのサマーコートを着ているその男は、試聴機の前で微動だにしない。

そういえば、マリファナを吸って、効果が完全にきまった時に陥る最高の状態のことを、ストーンする、というらしい。自分の内側に入り込んで石のように動かなくなることからそう言われるのだが、目の前の男はまさにそんな感じで、音楽に没頭しながらストーンしていた。

今日はエレクトロニカの試聴は諦めた方がよさそうだ。
僕は振り返り、タワーレコードの店の出入口となっている、エスカレーターの方へ足を向けた。
歩いていくと、入口にあたる上りのエスカレーターの真ん前、店の入口のトップに、レディ・ガガの派手なディスプレイがあった。

レディ・ガガだ。

僕は思う。

レディ・ガガは素晴らしい。
アーティストというのは、こうあるべきだ。
世界に対する自分の態度やスタンスを明確にして表現するのがアーティストだ。正しいかどうかじゃなく、私はこれである、と鋭く鮮やかに打ち出して見せるセンスと覚悟がアーティストの才能だ。ボブ・マーリーもジョン・レノンもマイケルジャクソンもマドンナもピストルズも清志郎もブルーハーツも、みんなみんなそうだ。

最近は変に賢くお洒落に立ち回る、主義の曖昧なただの音楽屋ばかりだ。それはつまらない。
僕はもっと挑戦的なものが見たい。

去り際に、大きなポップに印刷されたド派手なメイクのレディ・ガガと目が合った。

地球丸呑み。

不意にきた。この、宇宙人みたいないかれたメイクで、地球を丸呑みしようとするレディ・ガガを思い浮かべる。
それと同時に、僕が一緒に飲み込まれるところを夢想した。

早足で出口のエスカレーターに向かう。僕は口元に笑みを浮かべた。

だから、レディ・ガガは最高だ。

レディ・ガガ

「レディ・ガガのCDよ」

「レディ・ガガ?歌手のですか」

女はプラスチックのスリムケースを差し出した。

「この中に入っているのはアメリカの機密文書。バグダッドの情報下士官が命懸けで持ち出した、政府の大量の極秘情報よ」

男はそれを受け取り、裏返してながめる。

「どんな内容なんです」

女は口元に含みのある笑みを浮かべた。

「秘密」

囁いた女の唇から空気が柔らかく緩むのを感じた。背が低く、まるで少年のように見えるその男は、困ったような、はにかんだような表情を見せて頷いた。

「とにかくこれを無事に届ければいいんですね」

「そう」

「わかりました」

男は、受け取ったＣＤをジャケットの内ポケットに挿し入れた。

「あなたの車はどこ」

「え」

「えじゃなくて。あなたがここに来るのに乗ってきた車はどこ」

「向こうの公園の脇ですが」

男は振り向いて、住宅の間にある小さな公園を指差した。

「じゃあ行きましょう」

女は、ハイヒールの踵を軽快に鳴らして歩き出した。

「一緒に来るんですか」

男が後を追う。

「じゃなくて、私が行くの。あなたは、カモフラージュ兼、護衛」

「カモフラージュ」

女は立ち止まり、振り返って男を指差した。

「そう。どうせ追われてる身だから大した効果は期待できないけれどね。誰かと一緒の方が見つかりにくいから」

男は、少しだけ不本意な顔をして笑みを浮かべた。

「役に立たないかもしれませんよ」

「何故」

「僕の専門はスパイ作業だけです」

女は一瞬微笑んだ。そして背中を向けた。

「大丈夫。そんなに期待してないから」

今度は本当に傷ついた顔をして、男は、颯爽と歩いてゆく女の後に続いた。

ロックを解除すると、女は車に乗り込んだ。男も続いて乗り込む。

エンジンをかける。

「自分の車の運転くらいは上手にできるでしょう。手順は分かってるわね」

「万全です」

男は気を取り直すように言った。

「出して」

はるつばめ

「はるつばめのせなかにのったんだ」

「なんて？」

「だから、はるつばめの、せなかに、のったんだ、ぼく」

「なにいってるの」

「ほんとうだよ。ぼく、のったんだ、ゆうべ」

「なんだよ、ゆめか」

「そう！すごかったよ。やまのさかをかけあがったり、うみがすごくしたにみえたり！」

「でもゆめじゃあね」

「ほんとうなら、あんな小さなはるつばめのせなかになんかのれないよ」

「ゆめだけど！すごかったんだ。そらのおうさまになったみたいだった！」

「おうさまかあ」

「それはすてきね」

「ゆめなんだ」

「うん」

「どうしてゆめをみるのかな」

「ねむっているあいだも楽しいでしょう」

「うん」

「きっとそのためよ」

「たのしいためなの？」

「じいちゃんは」

「うん」

「どこかのじぶんだって」

「どこかのじぶん」

「そう。このよにあるすべてのものはほんとうはひとつなんだって」

「ほんとうはひとつ？」

「だからこのうちゅうのどこかのだれかのほんとうをのぞいてしまうことがあるんだって。それがゆめなんだって」

「どこかのだれかもぼくなの？」

「そう」

「あら？なんだかこの話、まえにもしたことがあるみたい…

「だからゆめは…

4

「聖なる数なんだ」

男はマウスを動かしながら、部屋にいるもう一人の男に話し掛けた。

「なに」

「インディアンの慣習」

人が出払った静かな一課職員室。窓から差し込んだ西日が、部屋に浮いている埃を照らした。

「4が？」

「そう」

話し掛けられて、男は一瞬考える。

「何故」

「4はすべての真理を表す数なんだよ。東西南北の4方位。春夏秋冬の四季。この世界を理解する為のあらゆる法則に4という数字が絡んでる。音楽なんかも4が基本になっているね」

男は、萎びた書類の束をファイルに閉じた。埃が舞った。

「日本では４は不吉な数字だろう」

「そうだね」

ファイルの男は顔を顰めて、小さく咳を払う。

「聖なる数か」

「そう。聖数というのは様々の儀式や呪術に使われる数だよ。聖数は、その民族にとって、多数、を意味する数字だ」

「多数」

「数え切れない数の象徴だ。つまり、無限」

ファイルを閉じ終わった男は、煙草に火をつけた。

「無限か」

「そう」

男は煙を吐いた。

「たった４が」

「空気の組成はどんな感じだ。もう一度ざっくり教えてくれ」

「了解しました。少しお待ちください」

耳元から、レシーバーの回線のような小さなノイズが聞こえる。
目の前には、吸い込まれるようなブルーの空だ。そしてその下に白い砂漠が広がっている。

ここは…またなのか？

奇妙な形をした岩が無数に聳えている。空に向かってうねるような独特の形状が印象的な、神秘的な尖塔。その向こうには緑色の潅木の茂みが広がっている。目を凝らすと、地平線の切れ際には海が見える。
適度な湿り気を含んだ心地よい風が吹く、穏やかな気候だ。
そこに、光沢のある白いエナメルの消防服のようなものを着た連中が七、八人、言葉を交わしている。

「何だかとても心地よい気持ちがするわ」

「活力が湧いてくるようだ」

全員で伸びをして、深呼吸をする。

「やっと牢獄から解放されたな」

「永かった」

永かった？牢獄？

僕達を後ろから見下ろしているこの巨大な船のようなものがそうなのか。

これは。僕の知識では。

宇宙船。

それ以外の何物でもない。頭がつるっとした球形のこのデザイン。

いつか見た旧ソ連のロケット、ボストーク１号にそっくりだ。

僕達はその大きな影にすっぽり包まれている。

各々が思い思いに周囲を見て回る。と、言ってもあるのは、延々と広がる砂漠と潅木の茂み、それに、シュールな岩石のオブジェだけだ。

視界が前へ。また僕は

屈み込んで砂漠の砂の質感を確かめる。さらに岩の表面に触れてその凹凸をこじるように撫で回す。

その時、耳元で小さくノイズが鳴り、回線が繋がる音がした。

「出ました」

「うん」

回線を邪魔するノイズが一瞬高まった。うるさい。だがすぐに落ち着いた。

「まず窒素。Ｎ２が約７８％を占めています。次に酸素。これが２０％」

「平均的な組成だな。他は」

「他は１％に満たない微量成分が、アルゴン０．９％。さらに微量０．１％以下で、ネオン、ヘリウム、メタン、クリプトン、さらに水素、一酸化二窒素、一酸化炭素、キセノン、オゾン、二酸化窒素、アンモニア、二酸化硫黄。そして」

「何だ」

「原因は解りませんが、二酸化炭素の割合が非常に高いです。こちらは０．０４％」

「０．０４」

「はい。これは少し気になる数値です。場所を変えながら時間をかけて観察してみる必要があるでしょう」

音声が止み、静かなノイズに戻った。回線を一度落としたようだ。

「どうした。何かあるのか」

褐色の肌をした、ヒスパニック系に見える男が話しかけてきた。

「ＣＯ２の割合が多いらしい」

「何故」

「原因はまだだ」

「なるほど。我々には都合のいい条件じゃないか」

少し鋭い顔つきをした白人が口を挟んできた。米国系か。

「だからこんなに気分がいいのね」

「補助システムはいらないな。巨大な恒星があるから、光エネルギーも十分だ」

東洋系の女は前に見た。中国人だろうか。

前に見た？

何処で？

「植物も多そうだ」

「生態系はどうだろう」

それぞれ散らばって、屈み込んだりしながら周辺の植物群を細かく観察し始めた。

一人が声をあげた。

「これは」

全員が振り向く。

「みんな、見て」

「きれい」

全員が集まった。そして大きくざわめいた。
ふいに回線が繋がった。ノイズと共に声がした。

「どうかしましたか」

花。

鮮やかな色合いの赤い極彩色の小さな花だ。まるで、小さな火の輪
のように見える細かい花びらが可愛い。だがそれが何か

「花が」

「花」

「この惑星には、花が、残っている」

ENTER

鍵を開け、ドアノブを回した。

いそいそとその体を滑り込ませ、後ろ手に鍵を掛けて部屋に上がるなり、男は、パーカーを羽織ったままパソコンの電源を入れた。本棚の前にいき背表紙を指で素早く確認していく。人差し指には小さな鳥の入れ墨。そしておもむろに数冊の本を取り出し、パソコンの置かれた白いデスクの角に積み上げる。さらにその人差し指は本棚を上の段から下の段へと這い回り、小さく舌打ちをして、焦る手つきで、床に散らばっている無数の本たちを、手当たり次第に掴み上げては投げすてていく。あった。男は一冊の本を掴み上げ、積み上げられた本たちの一番上に、力強く叩き置いた。そして、白いデスクの上ですでに起動しているパソコンに被り寄り、キーボードを叩き始めた。

シノダ社製自動車ネクサスのユニバーサルジョイント部に関する重大な瑕疵についての詳細

「三日間考えて出てきたアイデアが結局それか」

前回とは違い、時間通りに現れたその男は、三日間分の無精髭をたくわえていた。背もたれのない椅子を後ろに傾けて、男はタバコをふかした。

「まあそれなら俺が考えてることも上手く織り込めそうだから構わないが」

「すまない。僕にはこういったことを考えるセンスはないみたいだ」

細身の男は、少しばつが悪そうに肩をすくめてアイスコーヒーを啜った。

「要するに」

無精髭の男はタバコを外して、口から煙を吐き散らしながら、言った。

「要するに、脅迫に使うというんだな、文書を」

根元に入れ墨の入った人差し指が、他の指と共にキーボードの上をせわしなく這い回る。左手で本をめくりながら、男はそこに書かれた内容を、自分の、現場の経験という生々しいフィルターを通して噛み砕きながら、モニターに打ち込んでゆく。

ハンドルの安定した操縦性を保証するステアリングシャフトは、

「役員を上手く引っ張り出せるかが要だ」

「できるかな」

無精髭の男は、口を閉じたまま煙を吐いた。目を細める。

「やるさ。常務取締役以上、監査役か、できれば専務」

「あの専務なら分かってくれるかもしれない。変わっていないんだろう」

「たしかそのはずだ」

使われているボルトの口径の不足から生まれる緩衝性が、ステアリング動作に不具合を生み出し、

入出力の角速度比Ｗ２／Ｗ１はｃｏｓγ／１－ｓｉｎ２θｓｉｎ２γで表され、

時々呼吸を置きながら、男の指は止むことなくキーボードを叩き続ける。

「文書は大丈夫か」

「なに」

「たとえ脅しだとしても、実効性のある弾を用意しておかなくては通じない」

そう言われると、細身の男は、自分の友人の顔を、色を窺うように不安げに見つめた。無精髭の男は眉を曇らせた。すると細身の男は、おどけるように、にやっと表情を崩した。

「大丈夫だ。文書の趣旨はもう頭の中に出来上がってる」

無精髭の男は、自分の友人を上目で睨んだ。そして、呆れるように鼻息を吹き出した。

「もうひとつ。もし交渉が決裂したら」

男は付け加えた。

「分かってる。僕の作った文書をＲＭでもホワイトハウスでも、好きなところに送ればいい」

以上がシノダ社製自動車ネクサスの瑕疵のすべてであり、これらの事実を告発的意味を込めて、そして、自動車産業全体に対する期待を込めて、同社に預託するものである。

男は手を止めて、人差し指でＥＮＴＥＲキーを押した。

これで、準備は整った。

世界

「あめの日はすき」

「うん」

「えーどうして？」

「だって」

「だって？」

「なんだかやさしいきもちになるもの」

「うん」

「いいのよ」

「え？」

「そうやっていってるの」

「あめが？」

「そう」

「んー」

「ほら」

「つめたい！」

「のぞいてみて」

「なあに？」

「いいから」

「んー」

「どう」

「わあ。すごい！せかいが」

「なに？どうしたのさ」

「せかいがこのなかにいるよ」

「みて」

「うん」

「どう」

「ほんとだ」

「あった？」

「あめのひとつぶのなかに」

「ふふ」

「あめのひとつぶのなかにせかいがある」

「やさしいおとだね」

「ふふ」

「ぼくもすきになってきたよ」

「とてもしずか」

「うん」

「ほしはあめの…

友人

もう7年くらいになるだろうか。

使い始めてしばらくの間はそのクリーム色の箱に秘められた価値がまったく分からなかった。機械にもデジタルにも興味はなかったし、テクノロジーの進化に大凡ついていけない、行こうともしない、僕はアナログ人間だった。

今ではこんなに薄っぺらい未来的なデザインに変わってしまったけれど、このディスプレイが僕達人類に与えた影響は計り知れない。

僕には友人がいる。

人間関係というものを、ある時期で放棄してしまった僕にとって、たった一人の、大切な友人だ。

大袈裟な外出がままならない僕が、いつでも会うことのできる、近所に住む高校時代の同級生。

僕の人生にパソコンを導入したのは、彼だ。当時まったくパソコンを持つ気がなかった僕に、最も安い方法で一式を、彼は揃えさせた。物欲に乏しい僕は、その金額で買えるならと、それに纏わるすべてをまったく理解しないまま、購入した。

そしてそれは正しかった。意味が理解できた時、そのクリーム色の箱は、僕の人生にとって必要なものであることが確信できた。それはまず、僕にとっては、無限の百科事典だった。そしてそれはやがて、外出しない僕が世界と繋がる為の重要なコミュニケーションツールになった。

要するに、それまでの僕には、その箱が何をするための道具なのかを理解できていなかったのだ。

ともかく、僕の人生に、パーソナルコンピューターをイントロデュースした彼が、久しぶりに僕の部屋に遊びに来る。
だからといって特に片付けたりはしない。好きな本やCDや画集なんかが、ビールの空き缶と一緒に転がっているこの部屋を存分に味わってもらおう。
新入りのCDくらいはかけておこうか。こないだタワーレコードに行った時に買い忘れて、結局アマゾンで購入した、映画「social network」のサントラ。Nine inch Nailsのトレント・レズナーが音楽監修をしてる。

うん。いい感じだ。

僕は思う。

どうして彼はこんなに生々しくて美しい音楽が創れるのだろう。ピアノの旋律は儚く美しく、かつ人間が普段意識しない一番柔らかい心の襞にあえて触れてくる。その裏側に、実は激しく乱れた感情が、押さえ込まれて発散されることのない怒りのように、至極抑制された音で繊細に織り込まれ、大きな破滅の予感が、水面に広がる波紋のように、世界に染み渡ってゆく。
涙が出そうになる。僕はこういう風景をずっと見つめ続けていたい。

目を閉じて陶然としかけた時、玄関のチャイムが鳴った。

ディキリークス

「知ってる?ディキリークス」

女は、中指の爪先を前歯で小さく噛みながら、言った。その爪先は淡いブラックパールに塗られている。

「ディキリークス」

「あら」

微妙にあどけない顔をした、運転席のその男は、何かが腑に落ちたように頷いて、口を尖らせた。

「いろんな国の重要な機密情報とかを暴露しちゃうサイトですよね。たしか創設者はオーストラリア人」

「そう。よく知ってるじゃない。さすがスパイさん」

女は、気のない素振りで、口調だけを大袈裟に驚いて見せた。

「ありがとうございます」

男も口先で答える。

「ふふ」

車は街の中心の五叉路に差し掛かる。女は、助手席に座って、何気なく前だけを見ている。

「ていうか、こないだニュースになってましたよ」

「そうだったかしら」

「相変わらず際どいことやってるんですね」

男は懐の、スリムケースに収められたＲＯＭデータを一瞬、意識した。

「そう。際どいの。だから絶対に無事に届けてね」

女はごく柔らかい口調で言った。

「興味は持たないようにします」

「その方がいいわね」

「知らない方がいいこともありますから」

男がそう言うと、女は、ほんの一瞬、刺を含んだ笑みを浮かべた。

「知らなければ切り抜けられることもね」

「何ですか」

「多分もう見つかってるわ」

「え」

運転をしながら、男は振り向きかけた。しかし何とか思い止まった。

「まじですか」

「ミラーで確認して」

「どれです」

「黒のハイエース」

男は目を細めた。バックミラーを凝視する。

「あれか」

こちらの車の５０Ｍ位後方に、黄色から赤に替わる信号の替わり際を、平然と乗り越えてくるフルスモークのハイエースがあった。

「さりげなく揺さぶりかけてみて」

「はい」

「こっちが気付いたことを悟られないようにね」

「やってみます」

男は緩んでいた両手を振り放し、もう一度ハンドルをしっかりと握り締めた。

0．3mm

「0．3ミリです」

「0．3ミリ」

「ネクサスには欠陥があります」

「欠陥。どこにあるんだ」

作業服を着た男は、脇に抱えていたクリアファイルから一枚の用紙を取り出した。

「ユニバーサルジョイント。ステアリングシャフトとギアボックスの連結部分です」

男は自動車のフロント部分の内部構造を描いた設計図を指先で示した。

「どんな欠陥がある」

「ｍａｄｅ　ｉｎ　Ｃｈｉｎａ」

「中国製の。何だ。」

「ユニバーサルジョイントの締結ボルトです。口径が、指定された規格より0．3ミリ甘いのです」

「0．3ミリ」

「このままでは連結部に緩みが生じます」

「どうなるというんだ」

「最悪の場合ハンドルが利かなくなります」

一瞬沈黙した後、探るような眼差しで目を細めて、上司は尋ねる。

「対象台数は」

「約五万五千台」

「なるほど」

最終工程を経て、完成したばかりのその自動車を思う。その貫禄ある姿を思い浮かべる。

「リコールしてください」

「とりあえず」

「専務」

「君は工場へ戻りたまえ。早急に対処を考える」

「専務」

工場長は追い縋った。

「大丈夫。君達現場の意思を踏みにじるような真似は絶対にしないよ。これはシノダが誠実に対処すべき問題だ」

「お願いします」

男は、作業ズボンの両膝を手の平でぎゅっと引き締めて深く頭を下げた。

男は、シルバーのフレームの眼鏡を外して、目頭を揉んだ。

２０１０年の夏だったと思う。新型ネクサスの発売キャンペーンを終え、予想を下回る売れ行きの不調により、社内に得も知れない緊迫感が漂い始めた、車の欠陥が発見されたのは、確かそんな頃だったはずだ。

販売促進の為の企画会議と東北の工場との往復で、心身ともに鈍い疲労感が溜まっていた。

全幅の信頼を置いている部下からの進言だった。

その工場長は大学時代の後輩でもあった。

彼の技師としての資質は素晴らしく、人間としても尊敬できる男だ

った。上司と部下の垣根を越えて、深く語り合える、彼は本当の友人だった。

瑕疵はすぐに見つかった。自動車の構造について深く造詣のある者でもすぐにはそれと分からないほどの微妙な瑕疵ではあったが、しかしその欠陥の重大性と、その結果起こり得る事態は深刻だった。

何故、それまで使っていた信頼のおける国産のパーツではなく、あえて中国製の部品を取り入れたのか。少なくとも製造業という業種においては一流とはとても言えない中国の製品を。

理由は、ひとつ。
安かったからだ。

例のＤｅｅＭＡＮ　ｂｒｏｓ．の破綻により吹き荒れた金融恐慌の波。それが、天下のシノダにも大きな影響を与えていた。

過剰なコストダウンの推進。２００９年問題による大量の人員削減。より安価な部品への移行の要請と人材不足の中で、製品の質を保ち続けることはすでに不可能だった。それまで築き上げてきたシノダブランドの安全神話は大きく軋み始めていた。

男は、欠陥の詳細を論理的に把握し、すぐに役員会議に諮った。

だが、ネクサスのリコールは否決された。

曰く、瑕疵の存在は認めるものの、症状が顕在化する可能性は極めて低い。そういうことだった。

正気の沙汰とは思えなかった。
自動車にとって、ハンドルは、命だ。ハンドルの操縦性を左右するステアリングセクションのパーツの欠陥は即、人命に関わる。症状の顕在化の可能性についても同様だった。仮にボルトの口径に0・3mmの不足があった場合、工学的には、起こり得るというレベルではなく、事故は、起こる。それが自動車のメカニズムだ。男の信頼する部下である友人は、そう言った。

抵抗は当然した。
ブランドの地位に関わる致命的な瑕疵であるからと、役員それぞれの個人的な説得も試みた。
しかし、会社全体の業績の悪化に加え、予想を下回るとは言うものの、ネクサスの販売台数はすでに六万に届くところまできていた。世界中に売り広まったネクサスのリコールは、社の置かれている苛酷な状況を考えると、極めて厳しい決断であると言わざるを得なかった。
この巨大な組織が十数人を擁する専務役員の中の、そのたった一人の説得に、首を縦に振る者はいなかった。

男はリコールを諦めた。社の構成員全員と共に、汚れた水を啜ることを決めた。

そして、アフターケアに関連する部署に有能な人員を集中させ、事後の対応の為の鉄壁の布陣を敷いた。
けれどもこれは所詮、対症療法だ。人命に関わる何かが起きてしまったら、すべては不毛な努力だ。

決定的な事故はまだ起きていない。だが、ハンドルの不具合に関するクレームはすでに相当数に上っていた。迅速な対応と徹底した精密検査でそれらをやり過ごしながらも、いつ事が起きてもおかしくない現在の状況の中で、男は、常に背後から狙われているような、嫌な緊張感にとらわれ続けながら日々を過ごしていた。

そんな時だった。電話がきた。それは匿名の電話だった。

秘書が受話器を取った。何事か、不明瞭な笑みを浮かべて、電話口を右手で押さえて上司に声をかけた。

「専務と話したいという方から電話がきています」

「誰ですか」

「それが、名乗りません」

「なら、きちんとした手続きを踏めない方へは取り次ぎできないと言ってください」

秘書はもう一度電話の応対へ戻る。何度かやり取りを交わして、また声をかけてきた。

「ネクサスの」

デスクに向かいながら、上司は目を向けた。

「ネクサスのハンドルについて知っていることがあると言っております」

クリプス

「お願い。もう楽にしてあげて」

激しい音がした。

金属の何かが床に叩き付けられるような激しい音。

「そのスキャナーの脇に追い込め」

腫れ上がった額から血を浮かび上がらせた男が、全員に囲まれている。男は尋常ではない敵意を発散させて、血走った目で制御のきかない涙を流しながら、自分を取り囲むすべてを睥睨している。

どういう状況なんだ？

またなのか？

手術室のように電子機器類が整然と設置された部屋だ。

だが、おそらくは薬品が詰まっていただろう半透明の瓶たちは粉々に割られ、散らばった中身の液体が白い床を赤青緑あらゆる色に染めていた。繊細な作業に使用するだろうはずのせっしや鉗子、メスなどに見える小道具類も、盛大に床にぶち撒けられ、その部屋の様はすでに秩序とは無縁の状態にあった。

取り囲まれた男が一瞬、あっ、と吐息を漏らし、がくがく痙攣してその場にへたり込んだ。

「今だ」

「加減するな。一気に終わらせろ」

一番背の高い男が前に歩み出る。右手に、野球用の金属バットを角張らせて一回り大きくしたような物々しい道具を持っている。男は、目の前で痙攣しているその対象を無表情で見下ろした。不穏すぎる。何をする気だ。やめろ。男はその巨大な金属を大きく振りかぶった。

痙攣している男の顔面が陥没した。一瞬、部屋がしんと静まり返る。打ち抜かれた男の顔面から、ぴゅっ、と一條、赤い滴が散ったかと思うと、次の瞬間、激しい鮮血が噴き上がった。

「いや」

女が目を背けた。顔面が損壊した男は、目の眩むような鮮血の中で、その口先を、不規則にぱくぱく動かしている。

「まだ息がある。とどめを刺せ」

背の高い男は、もう一度右手の道具を振りかぶった。

勘弁してくれ。

隣の男が、呼吸を詰まらせた。目に涙を滲ませて震えながら、肩を寄せるように手のひらで顔を覆い、その中で祈るように何事かを呟き始める。

「目を逸らすな。ちゃんと見届けろ」

手が。

僕の右手が。彼の両手を引きはがした。

巨大な金属の棍棒が、金魚のように口先をぱくぱくさせている瀕死の男の頭部を打ち砕いた。後頭部が弾け、血飛沫と共に、ゲル状の白い固形物が乱れ飛び散った。

「うっ」

隣の男は、膝を落として吐きもどした。薬品まみれの床の上に黄色い吐瀉物が叩き付けられる。

「これが俺達が行ったことの結果だ」

手を下した男が、赤い鮮血にまみれた棍棒を何かの装置の隅に立てかけた。返り血で赤黒く汚れた両手をズボンに擦りつける。

「どうだ」

褐色の肌をした黒髪の男が、頭蓋を砕かれた対象のそばに屈み込む。

「もう大丈夫だよ。息をしていない」

「脈は」

男は手首を探る。

「完全に停止した」

鋭く緊迫していた空気が緩んだ。室内に安堵の気配が広がってゆく。

啜り泣いている者がいる。
吐いている者がいる。
無表情で観察している者、目を閉じて自分の想いに沈み込んでいる者、怪我を負っている者も数人いる。
臨戦態勢の警戒は解かれた。逆立った獣のようだったその気配を、穏やかなものに戻す正体不明の人間たち。

こいつら一体何なんだ。そしてそれを冷静に見ているこの僕は。
彼、は一体誰なんだ。

「何故だ」

彼、が声を発した。
その場にいる全員が僕の方を見た。
音声機器の向こう側の声がそれに答える。

「分かりません。クリプスの投入によってこのようなアレルギー反

応を示した生物は過去に事例がありません。皆さんもご存知でしょう」

「知ってるわ。私達がこれまでに出会った最もか弱い生き物でさえ、クリプスは栄養素として機能したはずよ」

東洋系の顔だちをした女が横から口を挟んだ。セミロングの黒髪を後ろで束ねている。

「L7の光るホコリか」

手を下した男だ。肘を使って汗を拭いながら言う。

「実験フェーズはすべて踏んだはずだな」

「はい。今我々が定着しているこの環境の中で得られる生物資源のすべての類頭種にクリプスを投入し、問題のないことを確認しています」

「最類似種は」

「映像を」

通信機器の向こうでキーボードを叩く音がした。すぐに完了音。室内のモニターに映像がきた。

猿だ。

「なるほど」

「中間二足ＣＸ－２エイプ型ね」

「エリアＦインドネシアの学名では、オランウータンと呼ばれているようです」

「こいつも平気だったのか」

「異常は見られませんでした」

「となると、クリプスにアレルギー反応を起こしたのは、ブルノイドだけか」

その空間にいる全員の顔がそこに向いた。

あまりにも非日常的な光景だ。ゲームの様で、現実感がない。顔の半分以上を無残に叩き潰されたその男は、ＣＴスキャナーの最前部に背中でもたれ掛かるようにして、首を傾げて死んでいる。

真っ白だったはずの室内。だがその室内はすでにあらゆる方法で散乱され尽くしている。

部屋の真ん中に咲いた真っ赤な花は、あまりにも無惨だ。

下の歯だけが洞窟のように残された、損壊した頭部の生々しい断面を見て、胃の中から嫌なものが這い上がってくる。思わず目を背ける。

「課題が出来てしまったわね」

「ああ。原因が判明するまでこのケースの実験を続ける必要があるな」

女は足元に転がった空の小瓶を拾った。

各々少しずつ我に返り、惨憺たる状況の室内に、ひとつずつ、片付けの手を入れはじめる。

「引き続きサンプルの確保ね」

「気が滅入る作業だが、みんな頼む」

作業しながら全員が、さりげなく反応し、頷く。

彼、は、起動させたままだった何かの装置の電源をオフにした。そして、部屋の隅にあるロッカーに歩み寄り、中からモップを取り出した。

視界が右へ。

右手で顔を押さえながら壁に寄り掛かっている男がいる。

「大丈夫か」

「は。何とかな。だが早めに治療をお願いしたい」

男の顔は、こめかみから頬にかけて、皮膚をえぐり取られたような爪痕があった。そこからの出血で、着ている服の腹部まで赤黒く汚している。

「歩ける？」

スライド式の自動ドアが開き、男は東洋系の女に連れられて部屋を出ていった。

「死骸はどうする」

先刻手を下した背の高い男が、中東系に見える男と一緒に、部屋の真ん中に咲いた哀れな赤い花に手をかけた。
対象は力無く崩折れる。

「元いた場所に帰してやれ」

「了解」

二人はそれぞれ、上半身と両脚を抱えて、その体を持ち上げた。

「ちゃんとサマしてな」

脳天を潰された遺体が部屋の外に運び出される。

―となると、クリプスにアレルギー反応を起こしたのは、ブルノイドだけか―

さっき、何を言った？

あざみ

「いたい」

「ん」

「どうしたの」

「ゆびにとげがささっ たよ」

「とげ？」

「このやつ」

「あざみのふうせんだ」

「どこ」

「ここに」

「あかいつぶがでてきた」

「かして」

「なに」

「いいから」

「あ」

「ほら」

「おいしい？」

「しょっぱい」

「うーん」

「大丈夫？」

「ちくちくする」

「よくみたらたくさん」

「あざみのはらだ」

「いたい」

「うん」

「どうしていたいのかな」

「どうして？」

「ぼくがいたい」

「ぼくが？」

「ゆびがささったのに」

「んー」

「ぼくはなんだろう」

「まだいたい？」

「どうしてぼくはここにいるのかな」

劣性

「ほら。今日はこれを持ってきたよ」

「お」

白い本が差し出された。重みのある装丁に金色の筆記体で文字が書かれている。

「こないだ見てきた」

「ミロか」

僕は画集を受けとって表紙を開いた。

「すごく良かったよ」

現れたのは、一見意味のない、抽象的な、単なる線と色の複合体だ。

「空いててよく見れたし」

けれど、美しい。

原色を多用した、鮮やかな色彩の奇跡的な重なり合いと、自由奔放で無邪気な線描のコンビネーション。

「どう」

どこか古代文明の洞窟に描かれた壁画みたいな、けれども未来的で。
それなのに。

「何だか」

「うん」

「切なくなる」

懐かしいんだ。

「そうか」

「やっぱりミロは天才だ」

「そうだね」

「安易な感想ですまない」

「いや。それでいい。切なくなる、っていう言葉が何だか響いたよ」

「うん」

僕はページをめくる。胸の奥にあたたかいものが広がる。
これは、純粋な心が最後に辿り着いた造形美だ。

「案外的を得ている印象なのかもしれない」

彼は言った。

「そうかな」

「描く人ならではの感想だね」

南向きの窓の外に小さく雨粒がきた。

「最近は」

「何」

「描いてないのかい」

「ん」

「絵」

描いてない。

「調子が良くなくてね」

「そうか」

「元々筆は遅い方だし」

何を言い訳してるんだ。

「うん」

「年に１０枚が限度さ」

時間は腐るほどあるのに。無為な毎日を過ごしてる。

「じゃあ春の」

「出してない」

憂鬱になる。

「そうか」

スピーカーから、抑えた音量で聞こえているのは、物憂げで繊細なピアノ。

そして無機質に加工されたドラムのサンプリングだ。窓には雨粒が、間断なく打ち付け始めた。

「何をやって過ごしてる」

「特に何も」

喋りたくない。僕は屑だ。お前なんかに僕の気持ちは分からない。

「レズナーは素晴らしいな」

「分かるのか」

「分かる。ピアノの旋律に特徴がある」

「どう違う」

レズナーが素晴らしいのは確かさ。こういう才能が僕は欲しかった。僕の人生はすでに終わってる。もう、口を開くな。

「美しい。けれど、触って欲しくないところにあえて触れてくる」

「は」

「どうした」

「いや、何でもない。でもこれはサントラだ」

「サントラ」

こいつは分かって喋っているのか。思考がシンクロする。高校時代からの友人だ。やっぱり長く付き合っていると思考の傾向性みたいなものが似てくるのだろうか。それとも僕の内面を皮膚感覚で感じとっているのか。笑いにまでは至らないが愉快な気分が湧き上がり、憂鬱な感情が少しだけ霧散する。

「そう」

「ああ。こないだのデヴィッド・フィンチャーのやつか」

音がした。自動車が水しぶきを上げて走り過ぎた。雨はまだ静かに降り続いている。

「ショートフィルムを作ったぞ」

「ショートフィルム」

僕は爪先を噛む。割れた爪先の感触が神経に障る。だからその尖りを前歯ですり潰すことを試みる。

「ああ。そういう、映像なんかをやってるやつがいてね。そいつの新しい企画に誘われて」

「そうか」

僕には分からない世界の話だ。関係がない。

「端役の予定だったんだけど、出来上がってみたら結構重要な脇役になってた」

「ふーん」

「インディペンデントだけど一応俳優デビューさ」

「結構なことだ」

会うたびに、彼は新しい話題を振ってくる。いつも新しい何かを吸収し、経験を増やして僕の前に現れる。僕はその彼のことを凄いと思う。だが、彼は彼、僕は僕だ。

「今度イベントで上映されるから、観に来てくれよ」

「まあ、行けたらね」

多分行かないだろう。時間はあるけれど。

「8月最後の日曜日だ。このフィルムが公開されるのはこのイベントだけなんだ」

「覚えておくよ」

酷似

最初の数人は殺された。

それはいつからか殺されなくなり、

殺されなくなった回の犯行から現場に４という数字が残されるようになった。

そのことから、犯行を妨害している第三者Ｘの存在を仮定した。

だが本当にＸなんて存在するのか。

これは本当に殺人事件なのか。

暴行の愉快犯だろうか。

４という数字は捜査の撹乱だろうか。

目的は。

目的が暴行でも殺人でもないのなら、一体何が目的だ。

そもそも何故被害者に事情聴取できないんだ。上は何を考えてる。

最初の数件の被害者の遺体はどこへいったんだ。

髭面の刑事は、来客用のソファに寝そべって体をもたせ掛けながら、

灰皿に煙草の屑を積み上げていた。

「どうですか」

横になっている刑事の顔を窓から入り込んで照らす外からの光が、黒い影に遮られた。

「ん」

「例の４の事件、進展はありましたか」

刑事は顔を上げずに、視線だけを上に向けた。自然と下から睨み上げる形になる。

「何だ、お前か」

「浮かない顔してますよ」

髭面の刑事は、溜息とともに大量の煙を吐き出した。

「全然糸口が掴めんよ。俺はもしかしたら無能かもしれない」

「らしくねえなあ」

「ほざけ」

ソファの横に立った男は、職業上身についた習性からか、周囲を見回し、人の気配と足音がないことを確認した上で、声を落として、

切り出した。

「実は気になる情報が」

「何だ」

「海外でも酷似した事例が報告されました」

言葉の意味を一度斟酌するように、刑事は動きを止めた。

「海外」

「とりあえず報告を受けてるのは東南アジアですね。タイ、ベトナム、それからインドネシア」

「どう似てる」

「全身打撲、内外出血、激しい暴行を受けた上、路上、或いは田畑、山林に放置」

タバコを口から外し、煙を吐いて刑事は言う。

「よくあるケースだろう」

「それが手口によほど共通点があるらしく、情報の催促がきているようです」

話す男に目を合わせず、頭の中で何か考えを纏めるように、刑事は目を細める。

「それで」

「富裕層、庶民層問わず狙われており、被害者は全員死亡しています」

「遺体は」

「公表されていません」

「なるほど」

「どう見ます」

「素直に考えるんなら」

「はい」

「そっちが先だってことだ」

「つまり」

「被害者が死亡した事件に関してはすべて」

「先に」

「そう。同じ手口の一連の流れの中では、前半に行われた犯行だという見方だ」

想像していた通りの答えを聞いて、もっともだという風に頷きながら男は言う。

「そうなりますよね」

「だが」

「はい」

「そっちは別件だ」

「違いますか」

「俺はこの事件は愉快犯、そして無差別の犯行だと見てる」

髭面の刑事は、喫い切った煙草を、山盛りになった灰皿の縁を使って揉み消した。

「だったら」

「だからだよ」

「え」

刑事は片目を瞑って、何かの気付きを促すように男を睨み上げた。

「犯行に接点がないのならどこを切っても同じだ。あまり視点を大

きく持ち過ぎない方がいい」

男は一瞬考えた後、どこを見つめるでもなく小さく何度も頷いた。

「混乱する材料を増やさないってことですね」

「あくまでも、今、事件が起きているのは日本。そういうことだ」

「そうか」

二人は一瞬沈黙した。

「ん」

「そういえば」

男が口を開く。

「何だ」

「例のXはどうなったんです」

髭面の刑事は、頭の中でこれまでのすべての仮定を纏め上げるように、ゆっくりと、言った。

「複数犯。Xはグルだ」

マーケット

夜の闇はここにはない。

雑踏が行き交う露店街だ。チープな哀愁を帯びた赤青緑のネオンライトと、妖しく舐めるように広がる白熱灯の光が、夜を隠す。隙間なく立ち並ぶ屋台の数々。その横を、体躯の大きな男達が逞しい笑い声を上げながら自由に闊歩している。

くずれた色気を放つそのマーケットは、刹那的な熱狂を貪る人々とそして雑踏を、夜の奥へ誘うような、危うい生命力に溢れていた。

在日アメリカ兵向けの米軍村だ。米軍基地に隣接したこのマーケットは、一町区を丸々使った巨大な自由市場であり、あらゆる不正商品、海賊版がまかり通る治外法権区域だった。

「Ｈｏｗ　ｍｕｃｈ」

「３０００ドル」

目を見つめた。相手の目の様子を探る。

「ＮＯ」

その初老の米軍将校は両手の指を組んでテーブルに肘をついた。小さく柔らかく微笑む。

「この情報には価値がある」

向かいの男が言った。将校は答える。

「１５００$」

「だめだ。それでは売れない。２８００ドル」

将校は目を細めて、向かいの男の手元を睨む。

「本当に価値があるのかな」

「ある。関係者の中でも特に、一部の人間だけしか理解していないプレミアムシークレットだ」

男は表情を変えずに言った。あおってグラスを空にする。

「１８００$」

男は首を振る。

「２５００だ」

「２０００$」

将校は男を見つめた。

「負けたよ。ＯＫ。ｄｏｎｅ」

「ＮＯ．やはりやめる」

将校は男の口許の歪みを見逃さなかった。

「勘弁してくれよ、ダディ。ならいくらなら」

「１５００$」

「頼むよ。プリーズ、１６００$」

将校は男の目を見つめた。男も目を逸らさず将校の目を見つめる。二人は、木製のテーブルを挟んで、数秒間そのまま対峙する。

「ＯＫ、いいだろう」

初老の将校は掌を差し出して男を促した。向かいの男は、悔やむ顔をして目を閉じ、懐から雑紙で包まれた何かを取り出して、渋々将校に手渡した。将校は引き換えに紙幣を差し出す。それを受けとって枚数を確かめると、テーブルに小銭を置いて、男は席を立った。

「頼むよ。上手く使ってくれ」

そう言い残し、男は、剥き出しのコンクリートの床を蹴って店を出ていった。

男が蹴った床に、テーブルからこぼれた酒が浸み込んで、皺くちゃによじれた新聞がへばり付いている。

ディキリークス、サイトの言語対応を八ヶ国語対応に拡大。アクセス、匿名性の強化へ。

これにより、更なる重要情報投稿の加熱が予想され

てんとう虫

「むし」

「ん」

「あ」

「てんとう虫だ」

「かわいい」

「がんばってのぼってるね」

「うん」

「つかれるかな」

「こんなにみじかいながさなのに」

「うん」

「まだつかない」

「どうしてこんなに小さいのかしら」

「どんなきもちかな」

「みどり」

「くき」

「がんばれ」

「もう少し」

「やった」

「あ」

「とびそう」

「とばない」

「ちいさいせかいがおおきいんだね」

「ほんとは」

「こんなにおおきいのに」

「このはらっぱだって」

「じゃあ」

「うん」

「ぼくたちはどのくらいかな」

「あ、とんだ」

「ばいばい」

正義

「来ましたね」

バックミラーを覗くと、直進の体勢から急ブレーキをかけて、無理矢理左折してくる黒のハイエースが見えた。

「確定」

女は、皮肉に面白がるような口ぶりで、言った。

「撒きます」

「お願い」

エンジンの音がやけに耳につく。

「できるならさりげなく」

「やってみます」

路上駐車の車が乱雑に並ぶ二車線の道路だ。

男はアクセルの上に置いた足の爪先に少しだけ力を込めながら、どうすれば呼吸が外せるか考えていた。

ハイエースは、つかず離れずの距離で、二人の乗っている車を確実に追跡してくる。

何故、追われるのか。

このＲＯＭデータの中には、一体何が入っているのか。

アメリカの機密事項だと、女は、言った。

しかし、一般的に国家の機密事項というのはどの程度のものを言うのか。失敗して追跡者に捕まった場合、自分の生命に危険が及ぶのか、あるいは殺されないまでも拉致され、自由を奪われるのか。それとも単に自分の、仕事人としての名前や信頼に傷がつくだけなのか。

だが、それを知る必要はない。あくまでも自分は依頼者の要求通りに仕事をこなすだけだ。

「少しきつく曲がります」

「やって」

男は急ブレーキをかけてハンドルを左に切った。二人の体が遠心力で右に煽られる。

スパイはいつも知らない。

自分が関わる仕事で取り扱う、物や情報や人物が何を意味している

のか。

また、仕事が無事に遂行された先に生まれる結果が、世の中的にどんな意味をもたらすのか。

その行為は、善なのか悪なのか。

「どうですか」

「まだだめよ。きてるわ」

男は信号が赤に変わる瞬間に交差点に進入し、ハンドルを右に切る。車は幹線道路に入った。

追跡者は構わず右折してきた。横の信号が青に変わる寸前にアクセルを吹かして、強引に軌道に乗る。

「本気ですね」

「もういいわ。飛ばして逃げて」

女は、後ろを目視して言った。

「了解」

男はアクセルを踏み込んだ。

世の中に正義など存在しない。
若しくはすべてが正義だ。争いとは自分が正義だと信じる者同士のぶつかり合いだ。
男は、いつの日からか、正しさを判断することをやめた。
倫理観を放棄したのだ。

この仕事の依頼者は、どちらかと言えば後ろ暗いところのある人間ばかりだったから、開き直って、価値判断の基準を少しずつ棄てていくのにはとても都合が良かった。

男は、大型の貨物トラックをかわして右側車線に入り、もう一度、さらにアクセルをきつく踏み込んだ。

景色が、捩れた。

西日

「兄貴が、何で」

若い弟は作業着姿のまま、上司に困惑の目を向けた。

「技術盗用だ」

「盗用」

「例のエコカーに使われている技術の一部が、アメリカの家電メーカーの特許権を侵害していた」

上司は、胸の内に湧き上がった悔しさをさっさと吐き出してしまいたいとでもいうような早口で、事務的に告げた。

「侵害って、兄貴は」

「意図したことではないだろう」

「だったら」

上司は一瞬言い淀み、そして、抑えた口調で、言った。

「訴訟ビジネスって知ってるか」

「そしょうビジネス」

若い弟は、澄んだ瞳で、反復した。

「裁判だ」

「裁判。訴訟か」

言葉を理解できたことで一瞬晴れた弟の顔は、上司の顔色ですぐに硬くなった。

「訴訟が金を生む」

「金を」

「そうだ。賠償金目当てに訴訟を起こすビジネスがアメリカで流行してる」

陸橋の上を電車が走っている。陽の光に照らされて送電線が煌めいた。

その陸橋の灰色のコンクリートの下に、古い電話ボックスがあった。

「会社は」

弟は、事態の深刻さが徐々に飲み込めてきた様子で、険を含んだ口

調で尋ねた。

「研究員の一人を守る気はないそうだ」

「そんな」

弟は大きく息を吐いた。上司が言葉を引き継ぐ。

「圧倒的に不利なんだ。賠償金の請求金額が大きすぎる」

何かに気付いたように、弟の瞳に光が戻り、鋭く疾った。

「会社は逃げたのか」

「落ち着け」

上司は、弟に、さらに自分にも言い聞かせるように宥める。

「シノダは、逃げたのか」

「落ち着くんだ」

上司は声を荒げた。

その口調は、明らかな諦観と嘆きを含んでいた。

男は受話器を置いた。
何年ぶりに使っただろうか。公衆電話の黄緑色の本体を一瞥して、折りたたみ式のスライドドアを開いて、通りに出た。

男は、コンクリートの隙間から差し込む強い西日に、目を細めた。

専務は変わっていなかった。
相変わらず優しく穏やかな口調だった。だがしっかりと芯のある論理的な話し方で、誠実に対応してくれた。

明日、専務と会う。

男は、右手を額に翳して西日を避けながら、陸橋の下のトンネルに入った。

右手人差し指の付け根にある小さな鳥の入れ墨。

いつ、刺したのか。

男には、兄がいる。
だが今は塀の中だ。

兄は、それまで生きてきた人生の誇りをすべて踏みにじられて、逮捕された。

兄は自動車工学の研究開発者だった。

新しい技術を開発した。環境対応に優れた革命的なメカニズムだ。研究室の教授はとても喜んでくれ、それはすぐに実用化への道筋を掴んだ。

水素の抽出機関を搭載した、その新型の燃料電池自動車は、すぐに市場の賞賛を受け、エコカーの市場でＮｏ．１の地位を得た。

しかし、兄は逮捕された。

年月をかけて生み出したその技術の一部が、米国の家電メーカーの特許権を侵害していたそうだ。

侵害していたのは冷蔵庫に使われている技術の一部だったらしい。

後付けで捻り出されたことが明白な、ほとんど言い掛かりに近いこの訴えは、しかし極めて周到だった。

法律で外堀を完璧に埋められ、逃げ道を塞がれた上で莫大な賠償金を求められた会社は、兄を、売った。

結果、兄は。

個人として民事刑事双方の訴追を受け、多額の賠償金の支払いとともに、刑事裁判で罪状が立証されて、懲役の判決が下された。

兄が研究者として所属していた会社はシノダ。

研究者と技術者。
兄の訴追まで、兄弟は同じ会社の中で働いていたのだ。

男は、長く居座り続ける夏の夕陽の残光の中、繁華街へと足を向けた。

だから男は、日本の自動車メーカー、シノダ、そして米国の企業に対して忸怩たるものがあった。

この出来事で初めて、男は、日本の会社と世界との繋がり、その社会構造を実感として意識した。
世界は、牌を奪い合っている。それも、豊かな者ほど、醜く。

国際化。グローバル化とは一体何なのか。

誠実に生きようとする人間の、努力を蹂躙して利益をまき上げることを正当化し、それを競争による切磋琢磨だと言ってのける、愚劣な詭弁のことなのか。

ある日、男は同志と出会う。

「世界に疑問があるなら、僕達と一緒にこないか」

その日、男は、初めて、入れ墨を刺した。

受信

きた。

また、あの夢だ。

「この二人です」

巨大なモニター画面に、二人の男の顔が映し出されている。一人は綺麗な顔をした優男の東洋人。もう一人、画面の右側に映っているのは、鋭い顔つきをした赤ら顔の白人だ。

何故だろう。僕はこの二人の顔を知っている。

「すげえ」

「大したものね」

「歴史は本当だったんだな」

電子音が鳴った。

クイズに正解した時のような、やわらかくて丸くて高い音。

「これから二人には、彼らの記憶データの受け入れをしていただきます」

「覚悟はできている」

「新しい出会いさ」

そうだ。この二人だ。

モニター画面に映っているのは、この夢の中で何度か目にしたこの二人の男だ。

でも。何か違うような。

「リスクの高い手段ではありますが」

「うん」

「皆さんはプロジェクトの開始前に新規フォルダの開設手術を受けています。なので」

「遥か昔にね」

東洋人の方が言葉を加えた。一瞬沈黙し、スピーカーの声は、咳を払って続ける。

「なので人格干渉のリスクは大きく軽減される上に、自己制御も十

分可能なはずです」

「分かってるよ」

その場にいる全員が、二人を見守るように見つめた。

「それでは二人とも、ポッドの中に入ってください」

二人は歩み寄る。

「また棺桶か」

「できれば最後にしたいものだな」

真っ白いカプセルだ。軽自動車をそのままのサイズで球体にしたような何か。あるいは巨大なガチャガチャか。半球形の透明な窓が開かれ、二人は中に乗り込んだ。

「入りましたね。それではキャノビーを閉じます」

「ＯＫ」

排気音とともに、半球形のウインドウがゆっくりと下りてきて、二人を守るように覆いかぶさった。二人は中のシートに座ったまま、姿勢を正す。

「首の後ろにある、メモリーチップ受け入れ口に、ＰＤカードプラグを差し込んでください」

カプセルの中で二人は、後頭部後ろから伸出している太いケーブル

を、自分の首元に繋いだ。

「それでは記憶データの送信を開始します。完了までの推定時間は3時間です」

二人は真っすぐ前を向く。微動だにしない。

転換音がして、モニター画面に二つのゲージが現れた。

「いきます」

場が沈黙した。

「3」

全員が二人を見つめる。

「2」

二人は目を閉じた。

「1」

画面に表示されたゲージの、その下にある文字のようなものが、高速で変化、せわしなく点滅反転し始めた。銀色のゲージに黄緑色のラインが1コマ充填された。

ゲージの下で乱れ踊る文字列はおそらく、作業の進行状況を示す残り時間かパーセンテージだろう。だがその文字は日本語でも英語でもない。
何だろう。アラビア語か。アラビア文字というのはこんな感じだっただろうか。

彼が。いや、僕が。
カプセルに近づいた。半球形のキャノビー越しに二人の様子を覗く。

優男の東洋人は、だらしなく口を半開きにしたまま、小さく唇を震わせている。注視していると、その唇の震えはやがて一気に全身へ広がった。シートの上で、体をばたつかせてがくがくと激しく痙攣する。

見開いた目からは黒目が失われ、恍惚とも苦悶とも言い切れない歪んだ表情で、顔を激しく引き攣らせて、半開きの口元から泡を噴くように、白い涎を撒き散らし始めた。

「本当に大丈夫か」

一人が音声機器の向こう側に問い掛けた。頬に大きな傷のある男だ。スピーカーから声が返る。

「現在、外部からの膨大な情報の侵入により、それに対する適応の為に、脳が急激に活動を強化しています」

「ショートしたりしないか」

「負荷のレベルと身体への影響は、モニター情報ですべて完璧に把握できているのでご安心ください」

受信（後書き）

楽曲の配信をはじめました。

【ｉＴｕｎｅｓ】（有料一曲＼１５０）
ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ａｐｐｌｅ．ｃｏｍ／ｊｐ／ｉｔｕｎｅｓ／ｄｏｗｎｌｏａｄ／

手順
？：ｉＴｕｎｅｓ＜音楽を購入する＜検索（終わりのないカルテット）

あお

「そらは？」

「あお」

「じゃあもりは？」

「んー。みどり」

「そうげんは？」

「みどり」

「ぶどうは？」

「むらさき」

「んー…じゃあ」

「うん」

「そうだ。あおってどんないろ？」

「どんな？」

「うん」

「えー？あおはあおだよ」

「みんなあおはおなじ？」

「んー」

「…わたしのあおは」

「うん」

「きれいでー、やさしくて…」

「うんー」

「…そして、とおいいろ」

「とおい？」

「うん。とおいの」

「んー」

「つづくの。どこまでもやさしくて」

「どこまでもかあ」

「たかいそらみたい？」

「そう」

「おなじかな」

「わかんない」

「ぼくのあおは…」

夏

髪だ。

伸び放題の長い髪の毛が、目の前にだらりと垂れ下がっている。

僕は俯いて、それを上目で眺めながら、ベッドの脇に体をもたせ掛ける。

悪い波がきている。

脳内トークが活発になり、自己否定的な意見が思考を支配し始める。

今日は快晴、ニュースによると、３０度を越える、真夏日だ。

晴れれば晴れるほど、気持ちが沈む。

遮光素材のカーテンを閉めきって、真っ暗な部屋だ。

蒸し暑い部屋の空気を、扇風機が掻き回す。起動したままのパソコンが、省エネ状態で黄緑色のランプを点滅している。

僕はもう、きっとだめだろう。

３０まで生きてきて、結局人生を何も開けなかった。

過ぎてきた時間が、今になって重たくて窒息しそうになる。
落ち込んだ気分が、心の隙間から漏れ出して、足元を黒く汚す。
そんな錯覚を覚えて、僕は目頭に拳を押し付ける。

追いかけて、追いかけても、掴めなかった未来は、あっさり腐った。
何かをはじめるには、もう遅すぎる。

僕は少しだけ体を起こす。
近所のガソリンスタンドから掛け声が聞こえてくる。入ってきた車を定位置まで誘導するための合図だろう。
とても不快だ。何よりその声に、積極性と軽快な響きがあることが許せない。貯蓄タンクに引火して、事故でも起こせばいいのに。

給油の最中に誤って垂れたガソリンに引火する。貯蓄タンクが爆発し、作業員、車の中で待っている客、もろとも派手に吹き飛ばすのだ。後には、人だったものの断片、車だったものの断片が、黒い煙が立ち昇るコンクリートの上に、申し訳程度に転がっている。そんな夢想をして、僕はにやにやする。

屈折している。
こんなことを思う自分にまた、激しい自己嫌悪を感じて、さらに気持ちが塞ぎ込む。

省エネ状態で、ランプだけが点いたパソコンを恨みがましく見つめて、僕は目を閉じる。

某巨大匿名掲示板だ。
通称、痰壺。

さっき暇にまかせて深入りして、負う必要のないダメージを受けた。

自分の描いた絵を晒すスレＰａｒｔ１２。

スキャナーで取り込んだ自分の油絵を、昨日僕は、このスレにアップしてしまった。

題名は、毛皮を纏った女。

２８：七つの星を持つ名無し
気持ち悪い

才能ナイネ

奇をてらうことを独創性だと勘違いしてる奴の典型

お前は　もう　死んでいる

みどり塗り杉

匿名掲示板特有の奇怪な言葉で手痛い洗礼を受けた上。

最後に、ブラクラを引いた。

毛皮反対！と書かれていただけのレスに、添付されたＵＲＬを開いてしまった。

開いた先のサイトでは、子犬がつぶらな瞳でこちらを見ていた。
画面右側サイドに表示された動画ウインドウには赤色の、生々しい何か。僕はそれを視界の端で確認して、すぐにサイトを閉じた。

元のページに戻った僕は画面を下にスクロールさせた。

子犬かわいそうなことになってたね

泣き声が頭からハナレナイヨ

ああやって殺されるんだな

僕と同じように、そのページを開いてしまった誰かの書き込みだった。

僕は、サイトにアップされていた生々しい動画コンテンツそのものよりも、むしろ、この、関係のないアマチュア絵画スレにこのＵＲＬをわざわざ貼り付けた人間の、底知れない悪意に背筋が凍り、吐き気を催した。

哀れな子犬のつぶらな瞳が、脳裏に焼き付いて離れない。
暗く沈んだ気持ちが、胸の内に、急激に広がっていく。

うだるような夏の暑さの中、僕は、闇の中にいる。

扇風機が、生暖かい空気を撫で回している。

夏（後書き）

楽曲のＹＯＵＴＵＢＥ試聴開始しました。

すべての歌に、謎がある。

ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｙｏｕｔｕｂｅ．ｃｏｍ／ｕｓｅｒ／ｂｅｔｏ７１ｏｖｅ

１０人のアブラハムが地球を狙っている

空白

「ずれだよ」

ピンク色のインベーダーが弾けて消滅し、１００点が加算された。

「ずれ」

「数字のずれが要になっている」

「何の話だ」

レトロなテーブルゲーム機だ。そこに二人の男が向かい合っている。一人はゲームをプレイしており、もう一人は向かいに座って、コーヒーを啜っている。

「おかしいと思わなかったのか。記載されている発売日のクレジットだ」

ゲームの男が言った。
ボタンを叩き、スティックを乱暴に回す。

「クレジット」

向かいの男は、テーブルに肘を付いてケースを眺める。

「そこに印刷された数字だよ。実際に発売された日にちと違うだろう」

「２０１１年５月８日」

ボタンを連打する音が店内に響く。

「実際に発売されたのは、２０１１年７月２０日だ」

「誤植だろう」

「そう思うか」

情けない電子音がした。

男は舌打ちしてテーブルの角を叩いた。

「ただの修正忘れじゃないのか」

ゲームの男は冷めたコーヒーを一口啜り、溜息をついた。

「何日のずれがある」

そう聞かれて、向かいの男は携帯電話のカレンダーを開いた。

「３１－８＋…３０＋２０…７３…」

「そう。７３日だ」

投入口に百円玉を押し込んで、男はリトライする。

「それが何か」

男は、迫り来る黄緑色のインベーダーを、斜めに連射して撃ち抜いた。画面上部のスコアに、スペシャルボーナスが加算される。

「一体」

男はレバーを強く捻り、右手をボタンに叩き付けた。

「この、空白の73日間に、一体どんな意味があるのか」

空白（後書き）

１ｓｔ．ミニアルバム「４」
２０１１．７月２０日発売　￥１０００

１：ｔｈｅ　Ｅｎｄ
２：セブン　レブン
３：愛と自由のブルース
４：インターネットでダウンロードしてください
５：カーナビはいらない

楽曲のＹＯＵＴＵＢＥ試聴開始しました。

すべての歌に、謎がある。

ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｙｏｕｔｕｂｅ．ｃｏｍ／ｕｓｅｒ／ｂｅｔｏ７ｌｏｖｅ

反復

「準備はいい？」

オレンジ色の液体だ。
試験管の中のその薬品を、注射器の針がピストンでゆっくりと吸い上げた。

「それでは注入してください」

注射器の針を斜めに接触させる。先端の輝きが、皮膚に浮き出した青白い血管にずぶりと飲み込まれた。作業者はピストンを静かに押し込んでゆく。

彼、はそれを見つめている。

これは、夢だ。

僕は？僕の意識は？

やはり彼だ。

僕は彼の意識。

「1mm」

「2？」

「3？」

注射器の中の液体に、血液が勢いよく噴き込んで赤く煙った。

「OK、そのくらいで」

「配置につけ」

寝台の上に、人がいる。

寝台は、僕の感覚からすると、極めてハイテクなデザインに感じられる。明らかに機械と分かる質感なのに、配線は存在せず、滑らかな曲面だけで構成された外観。

寝台の上の中年は眠っており、その体には、ロックが掛けられている。

両手両足と太股、さらに腰、胸、首と、成人男性の二の腕ほどもある、頑丈そうな金属のロックが全身を押さえ付けている。

「これまでの統計では、薬が効き始めるまでにおよそ3分」

室内では電子機器類の準備に携わる者、薬品の管理を行う者、

「心電図、脳波、その他計器類の準備確認」

さらに、武装している者が、その後方に待機して状況を見守っている。

「アレルギー反応に至るまでは、それからさらに5分です」

音声が途切れた。

静寂。

無為な時間が生まれた。

対象を見つめる。
時間が融けていくのを、全員がじっと待つ。
張り詰めた気配を、互いが牽制し合っている。

「クリプスの成分が脳に回り始めました」

緊張感が増した。

自分の器具をじっと見つめる者、きつく目を閉じている者、ストレ

ッチを行う者、各々が自分の作業手順を確かめているように見える。

「7分。そろそろです」

「構えて」

全員が、寝台の上の男を注視する。

男は微動だにしない。

全員が様子を伺いながら、半歩、近づいた。

「油断するな」

男は微かに鼾をかいている。

それにつられて、後ろで誰かが欠伸をした。

「平気なんじゃないか」

頬に傷のある男が小さく呟いた。右手に金属の棒を構えている。

一同の空気が一瞬、緩んだ。

金属が、鳴った。

寝台の上の男は、いきなり、反り返った。金属のロックに全身を激しく打ち付ける。

「きた」

全員が構えた。

「限界まで持ちこたえてください。データを即時記録します」

寝台の上で反り返った男は、ロックに固定され、全身を突っ張ったままの体勢で、吼えた。

脊椎の裏側から無理矢理搾り出されたような、甲高い低音。その異様な叫びは、その場にいる全員を凍り付かせた。

寝台の上で反り返った男は、そのままの体勢から立ち上がろうとした。金属のロックが、手首に、足に、胴体に、首元に、激しく食い込む。男は、怒りとも困惑ともつかぬ苦渋の唸りを発し、さらに力を込めた。込められた異常な力が、金属の耐久力と拮抗する。

男は大きく息を吐いた。

金属の方が、先に悲鳴を上げた。

「おお」

金属が軋む。

「信じられない力だな」

張り詰めた筋肉が、金属のロックを切迫し、捻り上げる。

「だめだ。ロックを解除しろ。寝台が変型する」

右手に嵌められたロックが捩り上げられ、捻り壊された。

「セルニクス合金だぞ」

男の体を繋ぎ止めていた9ヶ所の金属のロックが、中心から二つに分かれ、起動音とともに、左右脇に開いた穴に、すべて収納された。

全力で反動をつけていた所につっかえを失って、男は、寝台から派手に転げ落ちた。

床に這いつくばった男は、小さく呻いて唇をぶるぶる鳴らした。白い涎を周囲に撒き散らす。

「きたねえ」

彼は。いや、僕は、

モニター画面の状況を確認する。

寝台から解放された男は、寝台の脚、というか、太い基台のような円柱部分を両手で掴んで、激しく揺らした。駄々をこねる子供のような仕草だが、寝台は徐々に軋み、悲鳴をあげる。

「おい」

男は動きを止め、急に振り返った。

後ろから近づいた背の高い男は、不吉な予感を敏感に察知して、素早く後ろに飛びのけた。

対象は、全身でかぶりつくように飛び掛かり、そのまま壁に激突した。

白い壁が大きく凹み、対象は半身を激しく損傷した。首を振り回しながらゆっくりと起き上がる。

男の半身は擦り切れて裂け、血を流し、白かった壁は人の形に陥没して、そこに激しい血痕を残した。

「これ以上は危険だ。処置するぞ」

彼、は音声の向こうの人物に、言った。

「分かりました。損傷を出来るだけ抑えてください。それから」

一瞬ノイズが混じる。

「何だ」

声は一拍おいて、言った。

「御武運を」

「どうだ」

「お疲れ様です。皆さんご無事ですか」

暗い。

何処だ。

「心構えができていれば大丈夫さ」

狭い部屋。

空間内に、所狭しとモニター画面が敷き詰められている。
管理制御室のような部屋だ。部屋は暗く、照明はモニター画面の明かりだけ。椅子に座った何者かが、こちらに背を向けている。

「見てください」

「うん」

モニターだ。一番下の列の若干左側にある画面を指差して、その人物は、言った。

「精神神経系の大脳、前頭葉に、他の生物にはない反応が見られます。微少ですが」

華奢に見えるその男は、短い黒髪の巻き毛で、肌も黒く見える。眼鏡をかけたその男は、休むことなくキーボードを打つ。

男が指差した画面には図が表示されている。人間の脳の構造をデフォルメしたものだろうか。柔らかい印象の黄色で表された、面積の大きな部分。その、真ん中より少し左側に、青く点滅している一点がある。

「仮定は」

「はい。これを見てください」

男はキーボードを打つ。脳を表示していたモニターが別な画面に映り変わった。

「何だ」

人体を横から捉えた全身図だ。全身から矢印が引かれ、何かを説明しているのであろう、文字でびっしりと覆い尽くされている。

「生物には、必ず、生きる動機となる本能的な欲求があります」

「うん」

彼は、いや僕は、画面を覗く。画面の光が、顔に照り返す。

「クリプスとは要するに、生物のそういった欲求に働き掛ける成分です。つまり。食欲、性欲、睡眠欲。さらに、自己保存、種の保存を司る根源的な本能」

男の言葉に合わせて、画面上の、点滅しているポイントが移り変わっていく。

「ああ」

「そこに直接作用を及ぼして本能の活動を活性化させる。それがクリプスです」

すべてのポイントが選択されて点滅し、パズルゲームのクリアのときの演出の様に、回転し、統合されて、ひとつの化学記号のような文字になった。

「なるほど」

「ですが」

「うん」

男はキーボードを打ち込んだ。画面左下に、小ウインドウで、先刻の、脳の構造の図解が現れた。

男がキーを押すと、それは拡大されて、黄色い部分の中に、青く点滅する一点にフォーカスされた。

「それに激しく反発する、何かがあります」

反復（後書き）

1st.ミニアルバム「4」
2011.7月20日発売　¥1000

1：the End
2：セブン　レブン
3：愛と自由のブルース
4：インターネットでダウンロードしてください
5：カーナビはいらない

楽曲の携帯配信、開始しました。

すべての歌に、謎がある。
http://mero.jp/singer_detail_24653.html?a=qr&aid=pcsinger_nothing

脱出

揺れた。

世界が反転した。全身を食いちぎられるような強烈な衝撃だった。

一瞬飛びかけた意識を何とか繋ぎ止めて、男は、操縦桿に食らい付いた。船内に、異常事態を知らせる警告音がけたたましく鳴り響く。赤いランプの光とサイレンが、操縦室内を錯綜する。

「迎撃を受けました」

「どこからだ」

「メキシコです」

「メキシコ」

操縦室に設置された5台のモニターのうち、一番右側の画面には、地上から遠距離でおさえられた映像が映っている。現在のリアルタイムの、このスペースシャトルの映像だ。

「補助ロケットが炎上。本体にも亀裂が入りました」

「畜生。フロリダからの攻撃が囮だったのか」

スピーカーの向こうだ。誰かが、抑えた口調で叫んだ。

「推進力低下。高度を下げます」

操縦士は震える手でハンドルを傾けて押し込んで、必死で浮上を試みる。激しく揺り動かし、反応のない操縦桿に、男は癇癪を起こして両手を叩き付けた。スピーカーから声が返る。

「第二補助は」

「作動しません」

「サイドパッチは」

「開いてます」

音声の向こう側で、キーボードを叩く音。

「だったら落ち着くんだ。君のポケットには何が入ってる」

男は動きを止めた。胸のポケットに右手を当てて祈るように目を閉じ、ゆっくりと、静かに深く、息を吐いた。

「ボルネオ島第7フロンティアから全ラインに告ぐ」

「ライン接続。どうぞ」

「有人先発探査機5号「維新」打ち上げ失敗。米国連合メキシコフロンティアからの、大陸間弾道ミサイルの妨害によって撃墜されました」

「事後警戒態勢は」

「万全です。これより乗員の脱出動作を開始します」

「現在の軌道は」

「北緯１５度、赤道平行線上を東へ。墜落地点は西経１６０度」

「了解。救援艦隊を派遣する」

「Ｔｈａｎｋｓ」

炎が噴き上がった。船体の亀裂から、強い爆風とともに噴き出したエネルギーが、獰猛な唸りを上げた。サイレンが鳴り響く。

亀裂が走った。

激しい熱で熔解した巨大な金属が、頭上に倒れ込んできた。

血走った眼球に炎が映り込んだ。

男は、咆哮した。

視界が真っ赤に染まった。

世界は、音を失った。

強烈な光が、すべてを飲み込んだ。

「乗員、動力冷却室避難路からパラシュートで脱出」

「１２名全員を目視。確認しました」

青く澄み渡った東の空。その遥か上空で、橙色の閃光が、弾けた。

脱出（後書き）

１ｓｔ．ミニアルバム　「４」
２０１１．７月２０日発売　￥１０００

１：ｔｈｅ　Ｅｎｄ
２：セブン　レブン
３：愛と自由のブルース
４：インターネットでダウンロードしてください
５：カーナビはいらない

楽曲のｉＴｕｎｅｓ配信、開始しました。

すべての歌に、謎がある。
ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ａｐｐｌｅ．ｃｏｍ／ｊｐ／ｉｔｕｎｅｓ／ｄｏｗｎｌｏａｄ／

手順　？ｉＴｕｎｅｓ＜音楽を購入する＜検索（終わりのないカルテット）

ふうしゃ

「いい？」

「じゃああの丘のうえの」

「ふうしゃのところまでね」

「ＯＫ」

「よーい」

「あ

まって」

「なんだよー。こんなときに」

「なにさー」

「いまね、したの」

「した？」

「あきのにおい」

「あき」

「のにおい？」

「まだなつじゃん」

「ぼく、あつくてあせだらだらだよ」

「でも、したの」

「どんなにおい？」

「なつだよー」

「ぜったいあきのかんじだったもん」

「どんなかんじさ」

「んー

なんか…」

「うん」

「かえっていくかんじ」

「かえるの？」

「どこにー」

「わかんないけど…」

「わかんないの」

「でもなんか、むねが」

「むねが？」

「きゅってなる」

「きゅ？」

「くさのにおいがするよ」

「このにおいはすきだな」

「うん」

「なんかさみしいね」

「うん」

「あ」

「かぜ」

「みて」

「ふうしゃー」

「ふうしゃが、まわりだした」

ふうしゃ（後書き）

１ｓｔ．ミニアルバム　「４」
２０１１．７月２０日発売　￥１０００

１：ｔｈｅ　Ｅｎｄ
２：セブン　レブン
３：愛と自由のブルース
４：インターネットでダウンロードしてください
５：カーナビはいらない

楽曲のｉＴｕｎｅｓ配信、開始しました。

すべての歌に、謎がある。
ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ａｐｐｌｅ．ｃｏｍ／ｊｐ／ｉｔｕｎｅｓ／ｄｏｗｎｌｏａｄ／

手順　？：ｉＴｕｎｅｓ＜音楽を購入する＜検索（終わりのないカルテット）

a la mode

男は車を飛ばす。

何も考えない。眼球だけを動かしてバックミラーを確認する。黒いハイエースが一区画向こうに見える。追跡者は確実に距離を詰めてくる。

男は静かに息を吐いた。

「テンション上がってる？」

「はい？」

女の細い親指が、携帯電話のボタンの上をせわしなく這い回る。

「先に言っておくわ」

「はい」

「捕まったら殺されるわよ」

女は、携帯電話を弄りながらさりげなく言った。

「そうですか」

女の持っている携帯電話は装飾のないブラックのアラモード。高級感のある化粧品のようなデザインだ。

男は車を右車線に入らせた。
アクセルを強く踏む。流れるように5台の車を追い越して左車線に戻り、さらに一台躱して、もう一度右車線に車体を無理矢理捩じ込んだ。

男は何も感じない。
殺されると言われても、胸の内に動揺は生じない。何故か。

男は未来を考えない。普通、人間は、先のことを実感として想像する感覚を持っている。身に降り懸かる何かを頭の中で実感としてイメージする。だから恐ろしい。

だが男は、いつからかそれを麻痺させる方法を覚えた。男の頭の中で未来はすべて、只の映像でしかない。

「ねえ」

「はい」

「何が入ってるか」

「あ」

女は助手席から手を伸ばし、運転席の男の胸の裏側のポケットにその手を挿し入れた。スリムケースに収められたＣＤを触る。

「知りたい？」

男はそれに構わず運転する。

「やめておきます」

「世界の力関係が変わるわよ」

女は、男の胸ポケットの中でＣＤケースをそっと持ち上げた。

「知らなくていいです」

「国防総省の」

女は耳元で囁く。

「やめてください」

「ふふっ。怖いの？」

男の耳元に、女の吐息が触れる。

「知らなければ拷問されても答えられませんから」

「真面目なのね」

「仕事です」

女は声色を戻した。

「だったら死ぬ気で逃げて」

a la mode（後書き）

1st.ミニアルバム「4」
2011.7月20日発売　¥1000

1：the End
2：セブン　レブン
3：愛と自由のブルース
4：インターネットでダウンロードしてください
5：カーナビはいらない

楽曲のyoutube試聴、開始しました。

すべての歌に、謎がある。

http://www.youtube.com/user/be
to7love

「どうせないんだよ、そんなものは」

友人は、変色した枯木を優しく握り潰した。砕けて粉末になったそれを火の中にくべる。

「じゃあ」

柔らかい焚火の明かりが友人の顔を照らした。僕は問い掛ける。

「うん」

「死んだらどうなるの」

「目が覚めるだけさ」

揺らめく炎の中で、ちっと小さく火花が弾けた。

「目が覚める？」

友人は枕木の下に小枝を挿し入れた。そこに火が燃え移るのを確認して、話を続ける。

「単に今とは違うところで目が覚めるだけ。命っていうのは自分じゃないんだよ」

「自分じゃない」

暗闇の向こうに、水が砕け散る音がする。川のせせらぎが心地よい。

「そう。たとえば海があるだろう。穏やかな凪の海。そこに風が吹くと」

「波」

闇の中に一瞬、光が跳ねた。

「そう。小さな波が生まれる。これが命」

「波が命か」

「そういう風に考えるんだ。そうするとだ。凪の海に風が吹いて波が生まれた。だがせり上がった波は時が経てば」

「収まって凪の海に戻る」

目の前の炎の奥で、何かが音を立てて軋んだ。

「そう。これが、死、だ。ならば波はもう存在しないか」

僕は一瞬、考える。

そして、ビールの飲み口に口をつける前に答える。

「波は存在しない。けれど波は海の一部だろう」

友人は頷いた。

足元にあった長めの枝を使って燃木の位置を調整する。

「そうだ。波というのは海の一部なんだよ。そうして海に溶け込んだ波は」

「うん」

「海という大きな母体の中にありながら、撹拌されて、時を越え、あらゆる過程を経て」

「うん」

「たとえば地球の裏側で、形の違う波として、再び発生する」

「生まれ変わりだ」

「そう。この世のすべては循環する」

一瞬、沈黙する。

僕は、静かに流れる水の音に耳を澄ました。優しい音が心地よく耳を擽る。

「ロマンだね」

「茶化すな」

「真面目に言ってるんだ」

友人は一瞬、肩をすくめた。

「そして忘れてはならないことは。すべての過程において。波が海じゃなかったことは一瞬だってないってことだ」

「波は常に海だった」

「そう。これが関係性だ」

「何の」

「命と」

「うん」

「宇宙との」

夜の闇に、もう一度大きく火花が弾けた。

「宇宙」

「そう、宇宙。世界を理解する為の最も大きな単位として仮定するんだよ」

「波が命。海が宇宙」

焚火の火を見つめながら僕は考える。
喉元を過ぎたビールの冷たさが全身に滲み渡る。

「命とは、宇宙に生まれる小さな波だ。そして」

「そして」

「波とはあくまでも現象なんだよ。存在ではない」

僕は友人の言葉の意味を反芻する。

「存在ではなく現象」

「僕がここにいる、という現象、君がここにいる、という現象。自分とか自我とか心というのは宇宙に生まれる波としての一時的な機能にすぎないんだ」

「命は、現象なのか」

友人は頷いた。
そして、ビールに口をつけて喉を鳴らして飲み、一息ついてから、また言葉を接いだ。

「そう。そして、そう考えるとね。自我とか自分とかエゴとか。そういう、個としての意識や本能を発達させてしまった、人間という生き物の持っている、業について深く考えてしまうよ」

僕はビールに口をつけようとしたが、止めた。
燃え盛る炎を見つめ、そしてそれに照らされる友人の顔を見つめて、呟いた。

「一体何の為だろう」

「そこなんだ」

「そこ」

友人は頷いた。

「こんな風に、分かったふりして冷静に喋っている僕だって、自分に固執する気持ちに振り回されながら、生きている」

「存在を意識し、時には絶望して死にたくなる」

無意識に言葉が出てしまった。

「そうなのか」

「いつもさ」

僕は平静を装う。

「そうか」

「自我に苦しめられるんだ」

僕は羞恥に顔を俯かせる。炎の色が赤いのが救いだ。

「死にたいなら死ねばいいさ。それで何かが変わると夢を見るのも自由だ」

友人は頓着せずにそう言った。

焚火から移した枝で、タバコに火を点ける。

「変わらないか」

「知らないよ。僕は死んだことがない」

「当然だ」

枝を焚火の中に投げ込み、友人は咥えたタバコを吸った。タバコの先端が赤く染まり、ぢ…と音を立てた。

僕は友人が吐いた煙を黙って見つめる。

「だが、物質学的に云うと」

友人が口を開くと、残っていた煙が口の端から、ふわっと微かに漏れた。

「うん」

「おそらく無はない」

「むわない」

「有限無限の、無だ。氷は解ければ水になるし、水が蒸発すれば水蒸気になる。この世のすべては状態変化だけだ」

焚火と、それから友人のタバコの煙が、夜の闇の中に滲み渡るように融けてゆく。
僕はほろ酔いの頭でそれを眺める。

「それが現象ということか」

「生き物が死ねば、燃やされて気体と石灰の塊になるだろう」

「うん」

僕は目の前の火を見つめる。

「死ぬのも生きるのも、その程度のことでしかないんだ」

燃え盛る焔の奥で、何かが小さく軋み続けている。

「じゃあ」

「ん」

「魂は」

「同じさ」

「同じ」

「魂だって宇宙を構成する成分のひとつだ」

「そうか」

「そうだ」

「うん」

「何も変わらない」

ロマン（後書き）

１ｓｔ．ミニアルバム　「４」
２０１１．７月２０日発売　￥１０００

１：ｔｈｅ　Ｅｎｄ
２：セブン　レブン
３：愛と自由のブルース
４：インターネットでダウンロードしてください
５：カーナビはいらない

楽曲のｙｏｕｔｕｂｅ試聴、開始しました。

すべての歌に、謎がある。

ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｙｏｕｔｕｂｅ．ｃｏｍ／ｕｓｅｒ／ｂｅｔｏ７ｌｏｖｅ

始まり

眠っている。

いや、起きている。

暗闇だ。
植物の匂いがする。

「どうだ」

「若干重い気はするが、まあ大丈夫だ」

夜の森だ。
湿度が高く、薄い霧が霞んでいる。

虫の声が、闇の中に静謐に存在している。
細く張った一條の糸だ。耳に突き刺さる。
削いで削いで研ぎ澄まして、極限まで薄くした糸のようなその音は、
頭の裏側に染み渡って時間の感覚を失わせる。
夜の闇は、果てしない永遠に支配されている。

「受信後の脳は、しばらく少し不安定な状態が続くと思います」

「ああ」

返事をしたのは鋭い顔立ちをした白人だ。見たことのある男。
鷲っ鼻で、適度に体格がある。痩せた体型だが、強い芯がある印象を受ける。

「なので、これを」

黒い肌をした小さな男が何かのボックスを手渡した。携帯金庫くらいのサイズで、持ち手のついたメタリックグレーの箱。

「毎日、朝食後に一粒だったな」

闇に光る、男の目。
青い瞳だ。

「重要なことです。忘れずに」

肌がじめじめする。草露がふくらはぎに触れる。夜の闇の向こうから梟の声が聞こえる。

僕は頭上を見上げる。背丈の高い樹木ばかりだ。幹は少し細く、どちらかというと尖った葉の樹木だ。葉の密度はそれほど多くない。こういうのを針葉樹というのだろうか。

「脳の状態は、こちらでも常に観察モニターしておきます」

二人。

いや、彼、を含めて三人だ。僕は振り返った。

厳然と聳える木々の影の黒いシルエットの奥だ。巨大な建物のようなものが見える。一瞬照り返した銀色の光。きっとあれは前に見たボストークだ。例の宇宙船だろう。

「記憶のサーチは大分進んでいるのか」

「ああ。対象はなかなか興味深い人生を経てきているぞ」

鷲っ鼻の男はこちらに目を向けて、おどけるような仕草で肩をすくめた。口元に浮かべた笑みに、少々あくの強さを感じる。

「どんな」

男は、頭の中にある何かのデータを指差すように、中指の先で自分のこめかみを押さえた。

「出身エリアの地域性による言語の不完全性に悩んでいたようだ」

「言語の不完全性」

「同一言語でも、地域による差異が存在し、訛り、あるいは方言と呼ばれているようです」

背の低い黒人の男が横から補足を加えた。

「小さなことだ。他には」

彼、がさらに問う。

男は中指の先をこめかみに当てたまま、何かを確認するように何度も小さく頷いていく。

「これか」

「何だ」

鷲っ鼻の白人は、処理の仕方に困っているものを見るような表情で目を細めて首を傾げ、苦笑を浮かべながら、言った。

「大きな裏切りの種がある」

「裏切り」

彼、は、先を促すように問い返した。

男は片目を瞑った。開いた方の目で闇を睨み、何かに迷うように、一瞬静止する。

そして、言った。

「フォルダのサーチがすべて完了したら整理してデータを送ろう」

「頼む」

言葉が止んだ。虫の声が夜を埋める。

「ああ、それともうひとつこれを」

「何だ」

黒人の男が携帯電話を手渡した。かなり新しい型に見える。スマートフォンというのだろうか。

「通信機です」

「改造したのか」

「外観だけです」

「なるほど」

「ここから、南に２ｋｍ下りていけば小さな集落があるはずです」

黒人の男は、森の外に見えている車道を指差した。車のライトが通り過ぎるのが見えた。

「健闘を祈る」

僕は。いや、彼は、男と握手した。

「それでは」

鷲っ鼻の白人は真顔で小さく頷き、それから口元に笑みを浮かべた。

「いよいよプロジェクトの始まりだ。我々の光の先に幸運を」

始まり（後書き）

１ｓｔ．ミニアルバム「４」
２０１１．７月２０日発売　￥１０００

１：ｔｈｅ　Ｅｎｄ
２：セブン　レブン
３：愛と自由のブルース
４：インターネットでダウンロードしてください
５：カーナビはいらない

楽曲のｙｏｕｔｕｂｅ試聴、開始しました。

すべての歌に、謎がある。

ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｙｏｕｔｕｂｅ．ｃｏｍ／ｕｓｅｒ／ｂｅｔｏ７ｌｏｖｅ

すず

「すずだ」

「うん」

「ぼくがこれをならすよ」

「いいなあ」

「こら。これはあんぜんをわかるためのそうちだぞ」

「そうちだぞ」

「ぼくがこれをならすまでここにじっとしてるんだ」

「うん。わかった」

「ぶじにおひめさまを」

「たすけるんだ」

「いくぞ」

「…」

「…」

「…」

「…るるるー…

あ、しゃべっちゃいけないんだった！むむ」

「…」

「…まだー？」

「…」

りん。りん。

「やった！いくぞ」

「…」

「…」

「どこ？」

「…」

りん。

「そっちだ」

「…」

「…」

「いないー」

「…」

りん。りん。

「こっちか」

「…」

「…」

「ひびくのに」

「…」

「まだひびく」

「…」

「…」

「なんびょう？」

りん。

「…」

「…」

「ひびいてるのに」

「…」

「ずっとひびいてるのに」

「…」

「…」

「わかんないよ」

「…」

「…」

「ここは、どこー？」

すず（後書き）

１ｓｔ．ミニアルバム「４」
２０１１．７月２０日発売　￥１０００

１：ｔｈｅ　Ｅｎｄ
２：セブン　レブン
３：愛と自由のブルース
４：インターネットでダウンロードしてください
５：カーナビはいらない

楽曲のｙｏｕｔｕｂｅ試聴、開始しました。

すべての歌に、謎がある。

ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｙｏｕｔｕｂｅ．ｃｏｍ／ｕｓｅｒ／ｂｅｔｏ７ｌｏｖｅ

無為

スライムは嫌いだ。

簡単に倒せるけれども、切った時の油が、剣に纏わり付いて錆びの原因になる。

この粘るじゅくじゅくのせいで発生した赤錆を、一日の終わりに焚火の前でこそげ落とす作業がたまらなく憂鬱だ。

だったら刃物はやめて、いっそ棍棒にすればいいと言われてしまいそうだが。

しかし棍棒は駄目だ。

何故か。

ダサいからだ。ファッショナブルじゃない。ごつくて、膨らんでいて、見た目のバランスが悪い。

ある種類の鎧を避けるのも同じ理由からだ。

落ち葉を踏み締める。

湿った土の上でしわしわになった柔らかい落ち葉だ。

僕は頭上を見上げる。少し陽が傾いてきたか。木々の隙間から差し込む光が、白というよりは黄金色に近付いてきた。僕は気持ち足を速める。何とか日没前にはこの森を抜けたい。

本当はプレートアーマーが美しい。隙間なく全身を覆うため、防御性も高い。その上細身のシルエットと洗練されたデザインがこの上なくエレガントだ。

だが、僕には無理だ。あんな重い鉄の塊を着て動けるわけがないだろう。僕のひ弱さを侮るな。

そんな訳で僕は、女性でも着られるタイプのチェインメイルを愛用している。これなら軽いし、デザインもユニセックスで体のラインに合った美しい感じだ。

道が狭くなった。脇から飛び出した枝を払って、僕はさらに歩く。緩やかに湾曲したけもの道を奥に入った。そして右手にある櫟の木を見て僕は狼狽した。

見開いた目玉の様な紋様が気色悪い。

毒蛾だ。

僕は競り上がる悪寒を押さえ付ける。できることなら刺激せずにスルーしたい。掌より一回りほども大きいこのタイプの毒蛾は、厄介だ。

僕は背中を左側の茂みにぎりぎりまで寄せて、足を忍ばせた。落ち葉で埋まった地面のうち、土の露出した部分を選んで静かに足を置く。

櫟の幹に張り付いた毒蛾の大きな羽。死んでいるかのように動かな

い。だが、それはない。こいつはいつもそうだ。その見開いた目玉のような紋様が、僕の目を見つめる。

僕は毒蛾から目を離さない。この死んだ魚の目玉のような紋様が嫌だ。

この目で、内心の動揺を読まれている気がする。僕は足を前に出す。ゆっくりと優しく。そして静かに。

ぱきっ。

かいていた汗が一気に引いた。心臓が、本当に早鐘を打った。吐き気を催して僕は全身を強張らせた。呼吸を限界まで浅くする。

毒蛾は動かない。

僕は、相手の様子をじっと見つめる。数秒間。

その挙動を神経質なまでに確認する。毒蛾は何の反応も示さない。

大丈夫だ。

さらにもう一度目を細めて睨み、確かめてから、僕は足をゆっくりと前に出した。その時。

ばたばたばたっ！

昆虫というのにはあまりにも量感のある激しい濁音が、後ろから右耳のすれすれを掠めた。下半身から脳天まで食い破られるような、不吉な悪寒が全身を突き抜けた。僕は振り返った。

サラブレッドの駆け足のような羽音を立てながら、毒蛾は乱れ飛び狂った。猛烈な勢いで僕の顔面に打ち当たってきた。きな粉のような白色の鱗粉が辺りに散乱する。

一瞬、脳震盪を起こした。

眼前を光で見失う。僕は激しく動転して、柄に両手を掛けた。鞘から剣を引き抜こうとする。が、抜けない。毒蛾はさらに狂い飛び回る。不気味な目玉の紋様を持った巨大な掌が、さらに僕を追撃してくる。僕は熱くなって、抜けない柄を、剣が壊れるほどの勢いで激しく揺さぶった。

大きな掌が目の前に。

剣が抜けた。

僕は、身の毛がよだち脂汗をかいたその身を奮い起こして、震える両手で、鞘からやっと抜けたその長剣をがっちりと構えた。

畜生。そうだった。この鞘は右手を少し内側に捻り込まないと剣が抜けない。デザイン重視で購入した新しい鞘が、見事に裏目に出た。

狂ったように羽をばたつかせて僕の頬を掠めた毒蛾は、怖気のするような明確な意思をもって翻り、猛烈な勢いで僕の顔面に向かって滑空してきた。

僕は、剣を構える。

黄土色の皮膚に白いきな粉を塗したような、肉厚のある毒蛾の腹を僕は鋭く見つめる。

死んだ魚の目玉の紋様が、激しい律動を伴って一直線に僕に迫る。

僕は斬り下ろした。

斜めに。

そして、頭を低くして前方に素早く駆け込んだ。振り返る。

肉厚のある毒蛾の腹が真っ二つに切断され、橙色の体液をぶち撒けながらばたばたと後方に舞い踊った。二つに分かれた胴体はまるで別の生き物のように宙転し、そして、乱れ墜ちた。

地面に落ちた二つの毒蛾は、羽をぱたぱた動かしながら痙攣している。

毒蛾がその生命の煌めきを徐々に失っていくのを確認しながら、僕は全身を弛緩させた。

辺りの様子を確認する。

すでに森の中継地点だ。幸運にも叉路の脇に結界があった。

腰が抜けかけている。このクラスの獲物を仕留めたのは初めてなのだから当たり前だ。

僕は、脱力した情けない体を何とか引きずって、中継地点の傍にあ

る結界に近づいた。

今日はもう無理だ。この結界の中にテントを張ってセーブだ。

僕は、先発の旅人が描いてくれた五芒星の結界に身体を滑り込ませ、簡易テントを膨らませた。

ｎｏｗ…Ｓａｖｉｎｇ…

壮絶な死闘だった。

今日の冒険はこれで終わり。

僕は、リセットボタンを押しながら、電源を切った。

扇風機が室内の生ぬるい風を掻き回す。

今日も蒸し暑く、無駄に天気の良い日だった。８月も下旬だというのに、今年は一体何なんだろう。

僕は本体の脇にある一枚の紙切れを手に取った。

フィルムコンテストのフライヤーだ。

そうだった。確か今日は友人が初出演した映画のフィルム上映会だったか。

僕は時計を見上げた。

午後五時。もう終わっている。残念だが、仕方ない。

僕は温くなった発泡酒をぐいとあおり、喉を鳴らした。

無為（後書き）

１ｓｔ．ミニアルバム　「４」
２０１１．７月２０日発売　￥１０００

１：ｔｈｅ　Ｅｎｄ
２：セブン　レブン
３：愛と自由のブルース
４：インターネットでダウンロードしてください
５：カーナビはいらない

楽曲のｙｏｕｔｕｂｅ試聴、開始しました。

すべての歌に、謎がある。

ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｙｏｕｔｕｂｅ．ｃｏｍ／ｕｓｅｒ／ｂｅｔｏ７ｌｏｖｅ

鷸（前書き）

※鷸（ヒタキ）鳥類スズメ目。秋によく見られる。

黒いプレーントゥが瓦礫を踏み崩した。

足元を確かめながら、西日の差し込む窓際に歩み寄る。腐食の進んでいない極力綺麗な箇所を選び両手で窓枠を押さえて、男は窓から外を眺めた。

生暖かいが、それでもすでに秋の予感を孕んだ、心地よい風が男の頬を撫でた。

「ここ、閉鎖されてしまっていたんですね」

不意に声を掛けられて一瞬身体を固くしたが、男は年嵩の経験で、それを表に出すことなくのんびりとした平静な口調で返した。

「君の懐かしい職場だろう」

足音が響き渡る。

「その通りです。大好きな職場でした」

背後から近付いてきたその足音は、男の想像したよりも少し手前で留まった。窓枠の軋む音がした。
やって来た人物は男に目を向けず、そのまま外の風景を眺める。
隣り合った二つの窓から、男たちは夏の終わりの風景を眺めている。
細い影が男の上を通り過ぎた。遠くなり始めた空を鶺が掠めた。

「変わらない、と言ったら失礼に当たるかな」

「気にしないで下さい。僕も自分が変わったとは思いません」
若者は、含羞んで見せる動作をしたが、遠慮がちなその物言いとは裏腹に、発する言葉とその声色には、静かな覚悟を感じた。

「だが、いい面構えになった」
初老の男は心からそう言った。

「ありがとうございます。そちらも気力がご健在なようで何よりです」

「うん。お互い濃密な時間を過ごしてきたということだね」
男は振り返る。

若者は男の前に歩み寄り、姿勢を正した。

「お久しぶりです、専務」

鍋（後書き）

１ｓｔ．ミニアルバム「４」
２０１１．７月２０日発売　￥１０００

１：ｔｈｅ　Ｅｎｄ
２：セブン　レブン
３：愛と自由のブルース
４：インターネットでダウンロードしてください
５：カーナビはいらない

楽曲のｙｏｕｔｕｂｅ試聴、開始しました。

すべての歌に、謎がある。

ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｙｏｕｔｕｂｅ．ｃｏｍ／ｕｓｅｒ／ｂｅｔｏ７ｌｏｖｅ

海の砂漠（1）

彼、は、後ろから右手で男の肩口を押さえ、暗闇の中に煌々と光るディスプレイに目をやった。

モニターの強い光が目に痛い。僕は。いや、彼は目をしばたたかせる。

「残念ながら」

「そうか」

男は、タッチパネルのような黒いボードに指を置いて、無造作にスライドさせた。ズームインしたままのモニター画面が上下左右に乱れ動く。

「ですが」

男は指を止めた。

「うん」

「間違いなく存在するはずです」

「だめか」

男は画面を強く睨んだ。そして、自分の中にある何かの決意を確認するように、深くゆっくりと息を吐いた。

「少し外の空気に当たってくる」

「そうですか」

黒い肌をした男は、モニター画面に視線を置いたまま、背中で頷いた。

「あまり遠くへいかれませぬよう。あと」

「何だ」

キーボードを打つ手を止めて、男は振り返った。

「海洋性タンパク質を。獲れるようならお願いします」

一見すまなそうに頭を下げた男は、おどけるような表情で目配せした。

彼、は呆れるように鼻で笑って、頷いた。

純度の高い熱気だ。
間違いなく気温は高いはずだ。だがその空気は、じっとりとした蒸し暑さではなく、透明に澄んでいて、どこか気高い。

空を見上げる。

夜だ。夕方の橙色の名残が、空一面に淡く広がっている。赤みを帯びた紺色の、柔らかな色彩の空。

高い断崖の壁面に囲まれた地形だ。いびつな楕円形にくり抜かれたような形状を為した断崖の底に、例の巨大なボストークが厳然と存在している。

互い違いになった断崖の隙間から、海が見える。のんびりとした足取りでそこに入り込む。
ごつごつして足元の悪い断崖の裂け目を乗り越えると、視界が開けた。
その光景に、僕は目を見張った。

陸に、海があった。

切れ長くどこまでも続く白い砂浜の陸線。月の光に照らされて優しく煌めく砂浜に囲まれた湾の内側に、穏やかな海水を湛えている。

彼、は水際に歩み寄った。もう一度その景色を見渡す。

昔、図鑑で見たことがある。海に囲まれた南国の小さな島々にはラ

グーンという地形があると。

それは陸から連なる島嶼で囲まれた海域で、外海から緩やかに隔てられて波の少ない穏やかな地形を形成する。

今、目の前にある地形はまさにそれだった。視界の両端から細く伸びる砂浜には潅木が茂り、内海の手前真ん中には小島が聳えている。

もしこの世に、人魚が住む入り江があるとしたら、それはきっとこういう場所であるはずだ。

淡い紺碧の夜に浮かび上がる神秘的なシルエット。波と自然の造形美。

僕はしばらく心を奪われていた。

ぱしっ。

彼は。いや、僕は我に返った。何だろう。岩が砕ける音だったような。辺りの音に耳を澄ます。

ぱしっ。

目を細めて音のする方を睨む。凝視する。息を殺して、もう一度音がくるのを待つ。

ぱしっ。がらがらっ。

小島だ。塔と言うには低く岩と言うには大きい、上部が膨らんだ嵩のようになった、いびつな円柱型の離れ小島。音の出所はその周辺だ。

僕は目を凝らす。淡い紺色の空に、小島は艶のある黒いシルエット。上部の嵩の部分に黒い何かがぶら下がっている。

彼、は首を傾げて凝視する。

動いた。

ぱしっ。

黒い影がもがくような仕草をして、乱れた。

人だ。

彼、は駆け寄った。

ぱしっ。

もう一度音がした。

水面を打った。崩れた岩のかけらだ。

影の片手がはがれた。

「おい」

彼、は近づいた。思わず水に飛び込む。海水に浸かったズボンに、

温かさが浸み渡ってゆく。

「だいじょうぶ！」

嵩にぶら下がった影が、声を発した。僕は彼は見上げた。

少女だった。

褐色の肌をした黒髪の少女だ。月のささやかな光量だけが少女の華奢な体の輪郭を示す。か弱い細腕だけが少女の体を支えている。

「何かありましたか」

通信機が繋がった。ノイズ混じりの音声が耳に届く。少女が小島の嵩の縁でもがいている。

「いや、何でもない。鳥が目の前を掠めただけだ」

そう言って通信を切ると、彼、は島に駆け寄って少女の真下に登った。

小島は断層のように二段の構成になっていて、一段目は人間の腰くらいの高さで、海水の侵食した基部として成立している。

「手を貸そうか」

海水の侵食する面積の広い一段目の基部の上に、円柱型に聳え立つ高い崖のような二段目の子部。蔓草の生えた高い崖の、嵩の縁で少

女はもがいている。

「だめ、そこにいて。だいじょうぶだからっ！」

何だか愛嬌のある動きで両脚をばたばたさせて、少女は徐々に岩崖の嵩を這い上がっていく。ごつごつした嵩の凹凸を上手く利用する。

「やっ」

足を滑らせた。
崩れた岩のかけらが降ってくる。

「落ちるなら落ちてきても構わないぞ」

「だいじょうぶっ！」

両手で蔓草を掴み、壁面に両足を掛けた少女は、それを基点にした梃子の原理で自らの体をぐんと押し上げた。

「ほう」

嵩の上に登り切った少女は、息を切らしたまま、立ち上がってこちらを見下ろした。

「ほらね。大丈夫でしょう。今日はちょっと失敗しちゃっただけ」

「大したものだ」

「いつもやってるんだから」

少女は満足そうに微笑んでこちらを見下ろす。サテン生地の太陽色のワンピースが夜に煌めく。

「そこに上がると何かいいことがあるのか」

少女は一瞬躊躇した。

その後、嬉しそうに目を大きくして、悪戯っぽく含みのある笑顔を向けた。

「試してみれば」

彼、は岩壁に取り付いた。そのまま上を見上げてみる。上部の盛り上がった嵩が邪魔をして空が見えない。壁面の凹凸を使って少しずつ這い上がっていく。

ごつごつした岩肌の冷たい感触。

「蔓草も使って」

蔓草を視界の左側に確認する。左手首を回してそれを二重三重に巻き付ける。力を込めて引き絞り、草の根の強度を確かめてから、蔓草を思い切り引き寄せて自分の体を持ち上げた。下の様子が一瞬目に入る。僕は息を飲んだ。結構な高さだ。彼、は構わず上に登る。

反り返った嵩まできた。このまま岩壁を使って登るのは不可能だ。

一瞬考える。そしてすぐに、彼、は岩壁を掴んでいた右手を離した。両手で蔓草にぶら下がる。そのままよじ登っていく。

「すまない」

少女の手を取った。
温かくて小さな掌。だがそこに何か、とても強い意志のようなものを感じた。

「最後、気をつけて」

最後の足元から、欠けた岩のかけらが落ちていった。彼、は登り切った岩面をしっかりと踏み締める。
そして顔を上げた。

「これは」

「どう？」

→※海の砂漠（2）へ

海の砂漠（1）（後書き）

1st.ミニアルバム「4」
2011.7月20日発売　¥1000

1：the End
2：セブン　レブン
3：愛と自由のブルース
4：インターネットでダウンロードしてください
5：カーナビはいらない

楽曲のyoutube試聴、開始しました。

すべての歌に、謎がある。

http://www.youtube.com/user/be
to7love

海の砂漠（2）

そこには、海の砂漠があった。

果てまで続く浅瀬の海が月の光に照らされて、壮大な金色の鏡面を作り上げていた。

水平線の向こうまで広がる黄金の波面。それは、僕が見たこともないはずの砂漠の光景を思わせた。

「美しいな」

「私の大好きな場所」

僕は息が苦しくなった。この世にこんな場所があるなんて。

低い空に、燃えるような大きな月。

金色の鏡の絨毯は、地球の先まで果てしなく揺らめいている。

僕は、この光景に存在が飲み込まれてしまうような錯覚を覚えた。

そして、祈るような敬虔な気持ちが突き上げてきた。

「あなた、よその人」

二人は並んで座る。
冷たい岩肌の感触が心地よい。

「ああ」

「台湾の人」

「そんなようなものだ」

「なにそれ」

だが、僕は、彼だ。

これは彼の現実だ。彼は一体何者なのだろう。僕の意識は何故今彼の中にあるのだろう。

「分かった。日本人でしょう」

彼、は一瞬躊躇った。だがすぐに答える。

「そうだ」

「やっぱり！」

僕は搏たれた。
屈託のない笑顔というのは、こういう笑顔のことを言うのだろう。
くるくる表情を変える少女の横顔を見て、僕は何故だかきゅっと切

なくなった。

いや違う。これは。

これは、彼、の感情？

柔らかな風がきて、少女の髪の香りが鼻先を擽った。

「ねえ。ちょっと感動してるでしょう」

「ああ」

しばらく黙って、二人は同じ海の果てを見つめる。波の音が小さく寄せて、返す。

「あの方角にね」

少女が口を開いた。

「うん」

「ヒバクの島があるの」

「ヒバク」

彼、は聞き返した。

「知ってるでしょう。日本の人なら。このラグーンを越えた海の先にあるのがビキニ環礁よ」

「ビキニ環礁」

彼、は知らない。

ヒバク。ビキニ環礁。

靄が晴れる。僕の理解が澄み渡ってゆく。

「知らないの？水爆実験のあった海だよ。アメリカの」

「そうなのか」

まるで知らないことが信じられないというような顔をして、少女は教え諭すように彼、の目を強く見つめた。

「そうなの」

「そうか」

彼、も少女の目を見つめた。深い、ブルーの瞳。

彼、の心が、揺れた。

「だからね」

「ん」

「私たちはこの海の向こうの島たちをこう呼んでる」

「うん」

「いつか星の見える島」

大切な言葉を言うようにはっきりと呟いた少女の顔に、寂しさのようなものが滲んだ。それでも、少女は小さく微笑んだ。

「故郷なの」

波間に反射して揺れる月の光を見た。この海の向こうに少女の生まれた島がある。

「何故」

彼、は問うた。

「何が」

「何故、いつか、なんだ」

少女は問いの意味を計りかねて一瞬、困惑した表情を見せた。そして先程の故郷の島の呼び名のことだと解ると、曖昧な顔をして微笑んだ。

「何故って、ポイズンがあるからよ」

「ポイズン」

少女の目に一瞬、鋭い光が疾った。

だが彼の視線に気づくとすぐにそれは穏やかなものに戻り、少女は、感情を殺して、言った。

「放射能よ」

波の音が一瞬高まった。海のざわめきが頭の裏側に鳴り響く。

やっぱりだ。そうか、この島は。

心が、震えた。

心構えが出来ていた冷静な僕の心に、彼、の心の動揺が流れ込んできた。足場を失った感情が、出口を探して揺れ回る。

不安定な心のまま、彼、は言った。

「ウラン粒子か」

「正しくはそう言うの？私は分からないけれど」

彼、の心の中に、怒りとも哀しみとも、或いは、諦めともつかない、強い感情が燻りはじめた。
僕の心境とシンクロしてゆく。

「この美しい海に」

「そう」

「そうか」

「うん」

二人は視界に広がる金色の波面を見つめた。目の前の美しい海の姿に静かに身を委ねる。

距離にすれば一体何ｋｍくらいになるのだろう。
それなのに。
少女の故郷は果てしなく遠い。

二人の視線の先で、きらっと一瞬、波が光った。

「見えるといいな」

「え」

「いつか星が」

少女は俯いた。両手で抱えた膝の間に小さな顔を埋める。

「うん」

通信機がポケットの中で赤く光っている。彼、はそれに気付いている。

「もう行かなければ」

彼、は立ち上がった。

少女は、小さく打たれたように目を見開いた。

「うん」

「ありがとう」

「え」

「素敵な場所を教えてくれて」

彼、は少女を見つめた。
波の音が帰ってきたような気がした。
少女は優しく微笑んで、小さく一度、首を振った。

「ううん」

彼、は、微笑んだ。

「さよなら」

海の砂漠（2）（後書き）

1st.ミニアルバム「4」
2011.7月20日発売　¥1000

1：the End
2：セブン　レブン
3：愛と自由のブルース
4：インターネットでダウンロードしてください
5：カーナビはいらない

楽曲のyoutube試聴、開始しました。

すべての歌に、謎がある。

http://www.youtube.com/user/be
to7love

そうたい

「大丈夫」

「えー？だめだよ」

「ちゃんとなるのよ」

「いいの？」

「ほら、きいてみて」

「ん」

「うん、うん」

「どう」

「ちゃんとなってる」

「ほんとだ」

「すごい！いい！」

「ほら。ここからだって」

「んーんーん！」

「ちがうおとなのに」

「おんなじだ！」

「ふしぎだ」

「そうたい」

「そう？」

「そうたい、っていうのよ」

「そうたい」

「ほら」

「うん」

「どこからはじめても」

「るーるーるー」

「みんなつながってるの」

「わあ」

「どこからはじめても」

「きれいなきょくだ」

「ほんとうのことになれる」

「いいなあ」

「みんな」

「んーんーんー」

「なれるの」

そうたい（後書き）

１ｓｔ．ミニアルバム「４」
２０１１．７月２０日発売　￥１０００

１：ｔｈｅ　Ｅｎｄ
２：セブン　レブン
３：愛と自由のブルース
４：インターネットでダウンロードしてください
５：カーナビはいらない

楽曲のｙｏｕｔｕｂｅ試聴、開始しました。

僕は君の心に迷い込む
ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｙｏｕｔｕｂｅ．ｃｏｍ／ｕｓｅｒ／ｂｅｔｏ７ｌｏｖｅ

意思

空が、日に日に高くなってきた。
肌に触れる空気からは夏の熱気と湿度が薄まって、秋が近付いていることを感じさせる。

東北の県境、郊外にある自動車工場だ。壁面には雑草が密生し、閉鎖された工場であることが外からも窺い知れる。

場内に入ると、錆び付いたベルトコンベアが、一階から二階へと大きく湾曲して伸びている。窓ガラスはすべて取り払われており、赤黒い内壁に四角く吹き抜けた窓枠から、鮮やかな空の青が網膜を刺激する。

瓦礫だらけの工場の中で男達は向かい合っていた。

「僕は自動車が好きです」

若者が口を開いた。

工業特区になっているこの地域は、郊外であっても車の出入りが維持されている。

「ほら。あのエンジンの音が聞こえるたびに」

若者は耳を澄ます。

「愛おしい気持ちになる」

貨物トラックだろうか。

付近一帯に聞こえる虫の鳴き声の向こうに、遠く排気音が通り過ぎた。

一瞬沈黙し、窓の外の夏の終わりを噛み締めるように、若者は柔らかく目を細める。

白い太陽が瞼の裏側に煌めいた。

「ハンドルは大切なものです」

若者の、長閑で柔らかかった表情が失われた。口調から感情が消える。

若者は、向かい合っている初老の男を目で促した。二階と一階とを繋ぐ、鉄筋の階段へと足を向ける。

「自動車の意思に当たるものだ」

錆び付いたベルトコンベアを眺めながら、若者は階段に足を架けた。
初老の男は黙ったまま若者の目を見つめている。

「人間が意思を失くしたら生きてはいけません」

初老の男は、未だ言葉を発しない。階段のステップに足を架ける。
金属が軋んだ。
二人は、赤錆びた鉄筋の階段をゆっくりと下りてゆく。階段は、一度だけ向きを変えるロの字形の螺旋状になっている。
階段の向きの変わる中継地点は、全体監視用の小ぶりな展望台になっている。そこで足を止め、手摺りに両手を掛けて工場全体を見渡しながら、若者は口を開いた。

「ネクサスには欠陥があります」

若者は、言った。

「その通りだ」

手摺りに両手を掛けて生産ラインを眺める若者の後ろで、初老の男は答えた。

「随分あっさり認めるんですね」

若者は、意表を突かれたとでも言うように驚いた顔で振り向いてみ

せて、男の目の色を窺った。

「不服かね」

初老の男の表情から読み取れるものは何もない。

「不可解です」

若者は、男の目を真っ直ぐに見つめた。

全体監視用の老朽化した展望台の上で男達は向かい合う。背後には、役割をすでに終えた錆びたベルトコンベアが、埃で白くなりながらも、未だ堂々たる姿で存在している。

「決めてきたんだよ」

男は口を開いた。

その目は若者を見つめ、そしてその向こうの生産ラインを見据える。

「何を」

「うん」

男は一瞬目が虚ろになり、自らの思考へ沈む。

「何ですか」

男は息を吸った。

目に焦点が戻る。そして、集中力を失くしかけた自分を諫めるように、小さく微笑んだ。

「腹を割って話そうとね」

男は少しだけ上を仰いだ。ゆっくりと息を吐き、そして目を閉じた。

眉間に小さく皺を寄せる。

「どういうことですか」

男は若者に目を合わせず、若者の右脇から、鉄柵の向こう、階下のベルトコンベアを見据えた。

「君に負い目がある」

男は、言った。

「何の」

若者は男の目を見つめた。

「お兄さんのことだ」

男は見据えた視点を動かさずに、言った。

風が吹き抜けた。

ガラスのない窓から工場内を吹き抜けた風だ。

若者の顔から感情が消えた。

「上司としての責任感ですか」

若者は視界の端で男の顔を押さえる。目は合わせない。

「どう取ってもらっても構わないさ。だが」

「はい」

男のプレーントゥが、鉄床に残っていた瓦礫を踏み締めた。ぴしっ、という音が場内に響き渡る。

「私が君に正直であろうとする気持ちと、君の要求を飲めるかどうかは別な話だ」

「待ってください」

若者は目に威嚇の色を浮かべながらも、優しく追い縋った。

「リコールだろう。君の求めている未来は」

上司はかつての部下社員を、真っ直ぐに、見つめた。

意思（後書き）

１ｓｔ．ミニアルバム「４」
２０１１．７月２０日発売　￥１０００

１：ｔｈｅ　Ｅｎｄ
２：セブン　レブン
３：愛と自由のブルース
４：インターネットでダウンロードしてください
５：カーナビはいらない

楽曲のｙｏｕｔｕｂｅ試聴、開始しました。

僕は君の心に迷い込む
ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｙｏｕｔｕｂｅ．ｃｏｍ／ｕｓｅｒ／ｂｅｔｏ７ｌｏｖｅ

松明（1）

松明がもう二つしかない。

心細くなってきた火の具合を見つめながら、僕はそれでもまだ奥へ進む。洞窟の壁は岩が敷き詰められた、まるで冷たい牢獄のようだ。ここは昔、小さな盗賊団のアジトだったらしい。炭鉱街の麓にある洞窟だ。

もうすぐ火が消える。次の火を点さなければ。僕は革鞄から松明を取り出して、まだ点いている方の先端から急いで火を移した。ぼっ、と力強い音がして新しく頼もしい明かりが辺りに広がった。

はっとして僕は剣を構えた。

松明の火の有効範囲ぎりぎりだ。明かりと暗闇の境界付近に、何か水のような艶を持ったものが一瞬きらっと光った。

僕は歩を進め、呼吸を整えながら松明を床に置いた。柄を両手でがっちりと握る。

音が、撥ねた。

水のような、それ、が僕の足元に一気に流れ込んできた。僕は脇に飛びのけた。

それ、は実体を持たない泡の液体状のスライムだった。

僕は舌打ちした。こんな時にこいつか。最悪だ。

何故、最悪なのか。

理由。こいつには剣が効かない。故に。まだ魔法の使えない僕には方法が一つしかない。

それ、は敷き詰められた岩の上で、びちゃっ、と雑に弾けた。実体を持たない黄緑色のゲルが僕に降り懸かってきた。僕は顔を背けてしゃがみ込む。

ぼっ、と火が付いて、そいつは一気に燃え上がった。

僕は松明を振り回した。

空中で舞い散ったそいつの、あらゆる部分に松明の火は引火して、実体のない液体のそのじゅくじゅくは、まるで自分の内側に逃げ込もうとするかのように、体を丸め込む。僕は手を抜かず徹底的に、燃やす。

液体状だったそいつは、焼きすぎた目玉焼きのように、かりかりの小さな黒い炭の塊になった。

僕は最後にその黒い炭の塊を右足で雑に蹴り込んだ。スライムだったその黒い炭の塊は、冷たい洞窟の暗闇の中に砕け散った。

松明の火が消えた。

糞。忌ま忌ましい。せっかく燈した新しい松明の火は、すべてスライムに飲み込まれた。

僕はマッチで火を点す。最後の松明だ。さすがにここまでか。

僕は目を閉じて葛藤する。
やっとここまで来たのに。鍵の間はもうすぐそこなんじゃないのか。
だがすでに薬草も使い切ってしまっている。
僕は薄目を開けて松明の火を見つめた。松明の火は動ぜず、あくまでも柔らかい。
僕は舌打ちする。大きく溜息をつく。畜生。

僕は渋々踵を返した。

肩を怒らせて雑に歩み、来た道をなぞるように戻る。
無機質な同じ岩壁がここまで延々と続いてきた。だが、道順はすべて確実に記憶してきたから迷うことはないだろう。松明の持続時間は大体１５分。間に合うか。僕は早足で出口を目指す。

唸り声を聞いた。だが、構っていられるような余裕はない。松明を翳して僕は一気に駆け抜ける。Ｌ字形の通路が見えた。

その時、存在感のある黒い影が右脇を抜けた。
背中に強烈な悪寒が走った。僕は思わず急停止した。

野犬だ。
目の前に大型の野犬。帰り道を塞がれた。

僕は野犬の目をじっと見つめる。そして、見つめたままゆっくりと静かに腰を下ろす。野犬は喉の奥で小さく唸りながら、僕の挙動を見つめる。僕は右手に持った松明を通路の隅に置いた。

野犬が震えた。

それを視界の端で確認する前に僕は、目の前を逆手に薙ぎ払った。

左手で持った剣が空を切った。

跳躍した野犬は、左から孤を描くように僕の肩口に牙をぶつけて、そのまま後方に身を翻した。

僕は左手に持った長剣を両手で構え直そうと腕を持ち上げた。はずだった。だが、左腕が上がらない。

やられた。

左肩を生温かいものが包み込んでいく。僕は熱を帯びた吐息をついた。

やけに他人事に感じられるその液体は、おそらく身体から流れ出した自分の血液だ。

僕は振り返り、出口とは逆方向で唸り声を高めゆく銀髪の野犬と、真っ向から対峙した。右腕に持ち替えた剣を、野犬に対する威嚇の意味も込めて、片腕で大きく振り回してみる。

野犬は一瞬びくっとして足元を固定したまま、上体を退かせて後傾姿勢になった。上唇を激しく剥き出し、唸り声を高める。

長剣だ。やはり重い。だが、無理じゃない。

僕は剣の切っ先を野犬の顔面に合わせた。野犬は強い光を帯びた緋色の眼球で、僕の気の乱れを狙っている。

僕は、野犬は、互いに相手の命に集中して息を止めた。

睨み合う。

息が抜けた。

僕は柔らかく微笑んだ。

野犬は小さく首を傾げた。一瞬甘えるような声を聞いたような気がした。

気付いた時には、僕の切っ先は野犬の喉元に飲み込まれていた。
すぐに引き抜いた。
身を躱すように背中を洞窟の岩壁に寄せる。

貫かれた野犬の喉元から赤黒い血液が噴き上がった。

野犬は脚を縺れさせた。そして口から赤い泡を噴きながら、もんどりうって倒れた。
敷き詰められた岩の床の上で四肢をばたつかせて痙攣する野犬を見つめて、僕は大きく息を吐いた。

肩口が重く疼き出した。金鎚の、尖った釘抜きの側で思い切り打たれているような激しい痛みだ。気を失いそうになるのを何とか堪えながら僕は、足元の松明に手を伸ばした。その時。

L字形になった出口方向の右陰から低い唸り声が。

松明（2）

笑いが込み上げた。

自分の薄ら寒い笑いに全身が凍り付く。朦朧とする意識の中でも、その姿をはっきりと確認する。

群れで行動していた仲間だろうか。あるいは家族か。先刻打ち倒した個体よりも大きな野犬が二匹。いや、三匹。

僕は感情を殺す意識操作を試みた。僕は、淡々と処置をしてこの洞窟を出る。これは安易な作業だ。右手に握り締めた長剣を、切っ先を床に向けたまま軽く浮かせて引きずるような格好で、無心で歩み寄った。

いきなり斬り上げた。群れの先頭にいた、他と比較してやや小さめの個体だ。胸元から背中へと無造作に斬った。

目の前が鮮血に塗れた。頭部と右前肢を残して、後ろの本体がとたとたと二三歩歩き、そしてゆっくりと崩折れた。

左腕の機能を失ったままだったが、僕は一種の陶酔、覚醒状態になって、野犬の群れにさらに踏み込んだ。

一番大きな個体が僕の喉笛に飛び掛かってきた。僕は真一文字に薙ぎ払った。だが、その野犬は切っ先の軌道を飛び越えて僕の背後に着地し、さらに地面を蹴って後ろから僕の脇腹に喰いついた。

脇腹に鋭い痛みが走った。僕は逆上して、剣を握ったままの右肘を、野犬の脳天に全力で打ち付けた。

野犬は、ぎゃん、と声を上げて派手に地面を転がったが、すぐに態勢を立て直し、低い唸りを燻らせながら摺り足で間合いを測りはじめた。

間髪を入れず、もう一頭が低い位置から滑り込むように僕の左太股に噛み付いた。

激痛に声を飲む。僕は脚を振り回して必死で振り落とそうとしたが、長い牙が肉をしっかりと貫いていて、離れない。

僕は右手の剣を振り上げた。すると、間合いを測っていた大きい方の個体が右腕に飛び掛かってきた。

僕は我に返った。

やばい。

飛び掛かってくる野犬の目の中に、暗い欲望を見た。

やばいやばいやばいやばいやばい。

振り下ろした右手の長剣が空を切る。僕の一太刀を躱した個体は、捻り上げるように僕の二の腕の肉を薄くもぎ取って、後方へ飛び抜けた。太股の野犬はまだ喰らいついて離れない。

一番最初の野犬にやられた左肩口。それに脇腹。さらにこの太股と、それから、今やられた右の二の腕だ。流れ出した僕の温かい血液が

全身を包み込む。意識が抜けてゆく。

太股にぶら下がった小さい方の個体を僕は蹴り飛ばした。力のない蹴りだったが、野犬は素直に離れて距離を取った。僕は膝をついた。戦慄した。

それはすでに仕留め終わった餌を見る瞳だった。二匹の野犬はつかず離れずの距離で円を描くように僕の挙動を見つめている。

どうする？

「くたたかう
にげる
ぼうぎょ
どうぐ　」

どうするって。

もうどうにもならないだろう。僕は方向キーでカーソルを雑に動かしまくった。

「＜どうぐ　」

「　なにもありません　」

糞。駄目だな。さっさと戦闘を終わらして前回のセーブポイントからもう一度始めよう。

「＜たたかう　」

「　やけん　＜＜

「　＜＜

「　＜ぼく　」

「　ぼく　のこうげき！

ぼく　は7ポイントのダメージをうけた！　」

「やけんＡはようすをうかがっている」

「ぼく　のこうげき！

ぼく　は５ポイントのダメージをうけた！」

「やけんＢはようすをうかがっている」

「ぼく　のこうげき！

かいしんのいちげき！

ぼく　は１５ポイントのダメージをうけた！

あなたはしにました」

不愉快だ。レベル上げも無駄になった。僕は右ボタンを連打する。

「＜＜

ん。何だ。

「　ぼく　のこうげき！

かいしんのいちげき！

ぼく　は１５ポイントのダメージをうけた！

あなたはしにました　」

あ？

「　ぼく　のこうげき！

かいしんのいちげき！

ぼく　は１５ポイントのダメージをうけた！

あなたはしにました　」

「　ぼく　のこうげき！

かいしんのいちげき！

ぼく　は１５ポイントのダメージをうけた！
あなたはしにました　」

バグった。最悪だ。
僕はコントローラーを目茶苦茶に操作してみる。

「　ぼく　のこうげき！
かいしんのいちげき！
ぼく　は１５ポイントのダメージをうけた！
あなたはしにました　」

あー。駄目だ。

「　ぼく　のこうげき！
かいしんのいちげき！
ぼく　は１５ポイントのダメージをうけた！

あなたはしにました」

もうずっとこれか。永遠に。
僕は２４ビットの永遠について一瞬、思いを巡らせる。

「ぼく　のこうげき！

かいしんのいちげき！

ぼく　は１５ポイントのダメージをうけた！

あなたはしにました」

コンピューターの宇宙は、選択肢とプログラムによる単純な構造だ。
畜生。僕が一体何をした。

持っていたコントローラーを画面に投げ付けて、僕はリセットボタンを押した。

再チャレンジか。

いや。今日はもう止めよう。僕はそのまま電源を切った。

目を閉じる。何度も瞬きをする。

疲れた。

僕は天井を見上げて、ふうと溜息をついた。目を閉じると、外の雨音が頭の裏側に優しく鳴り響く。

台風が来ているらしい。川が氾濫する恐れもあるそうで、今日は一日、外出を控えた方が良さそうだ。

まあ、僕の場合は毎日のことだ。槍が降ろうが台風が来ようが変わらない日常。

携帯のランプが光った。着信だ。僕の携帯を鳴らす人間なんて、家族以外には一人しかいない。僕はディスプレイを確認した。やっぱりだ。腐れ縁の友人。僕は通話ボタンを押す。

「どうした」

僕はいつものように電話に出た。

「あ…？」

何故。

「え、あ…どうも。どうもお世話になっております」

友人の母親だ。

何故僕に電話を掛けてくる。しかも息子の電話で。

「…はい」

僕は無意識に貧乏揺すりを始める。

「え」

雨音が聞こえなくなった。世界が遠くなる。

携帯を握った僕の右手が激しく震え出した。それを押さえる為に左手を添える。

「どういうことですか」

友人が。

右手の震えが全身に広がった。

「死んだ?」

口元に笑いが泛ぶ。

「なんで?」

雨音が帰ってきた。
頭の裏側を、激しい雨の音がびっしりと埋め尽くしてゆく。
世界は止まらない。

松明　（2）（後書き）

1st.ミニアルバム　「4」
2011.7月20日発売　¥1000

1：the　End
2：セブン　レブン
3：愛と自由のブルース
4：インターネットでダウンロードしてください
5：カーナビはいらない

楽曲のyoutube試聴、開始しました。

僕は君の心に迷い込む
http：／／www.youtube.com／user／be
to7love

モンステラ

「本当にいないんだね」

暑い。

「早とちりしないで。ちゃんと調べるの」

耳の奥に虫の鳴き声が渦巻いている。まるでダイヤモンドが煌めいているようだ。

「分かってるさ。例えばこんな所に」

褐色の肌をした少年が、巨大な緑色の葉っぱを手でめくり上げた。

「不用意に手を出すな。ほらこれを使え」

頭の形の良いベリーショートの男が、何か、アルミの棒のような道具を差し出した。

「はーい。了解」

圧倒的な生命の匂いだ。胸焼けしそうなほどに濃密な緑色の世界。

遥か上空まで伸び育ち切った熱帯系の木々が、ここの生態系が極相に至っていることを示している。

熱帯雨林。

ジャングル。

そう。ここはジャングルだ。

密林の底まで突き刺さる白い光が、舞い散る土煙を鋭く照らし出す。

「しかし」

銀色の靴が乾いた土壌を踏み締める。

「ん」

人間の身の丈以上ある巨大な植物群を、金属の棒で丁寧に掻き分けながらベリーショートが言う。

「これらがみんな俺達と同じ呼吸構造を持っているなんて」

隣の男は感心するように深く息を漏らした。

「ああ。まったく信じられんな」

男はカールヘアの黒髪。見たことのあるヒスパニックだ。

一同は、巨大な原色の動植物を注意深く観察しながらも、全員がつかず離れずの距離で、奥へ分け入ってゆく。

彼、は全員の位置を確認しながら最後尾をカバーする。

ある植物に別な植物が張り付いている。そんな独特の植生も数多く見られる。

―これらがみんな俺達と同じ呼吸構造を持っているなんて―

同じ呼吸構造。

さっき、同じ呼吸構造、と言ったのか？

この巨大な植物達と？

何が？

「美しい生き物たち」

女が立ち止まった。

柔らかい印象の、少し丸い顔立ちをした白人だ。髪を後ろで二つに縛っている。

「ん」

「どうしてこんな色に生まれてくるんだろう」

見ると、大きな葉っぱに止まった鮮やかなオレンジ色の蛙が、喉を鳴らしている。冗談みたいにカラフルな色彩。艶のある粘膜は生々しい橙色だ。

僕達はつかの間、目を奪われる。

音が舞った。

遥か上方の林冠部を、巨大な鳥類が派手に羽ばたいた。一同は立ち止まる。差し込む太陽の光が一瞬遮られ、視界を失った。

「やはりいないか」

彼、は話し掛けた。

「地域性かもしれないわ。結論はまだよ」

東洋系の顔立ちをした女は、両手で何かの機械を構えている。本体正面に、膨らみのあるレンズのようなものを搭載した、立方体形の機械だ。背中にはジュラルミンケースを背負っている。

振り返ると、少し先に先程の少年が立っている。巨大な緑色の葉っぱを見上げて、動かない。

「おい。何して」

「本当に君はずっとここで生きてきたの？」

彼、は声を止めた。歩み寄るのもやめて、少年の言葉に、離れた所から耳を傾ける。

少年は、真っ直ぐな瞳で植物を見上げる。そして高く澄んだ声で、また、小さく話し掛けた。

「どこかに行きたいと思ったことはないのかい？」

後ろから草擦れの音が近付いてくる。彼、はそれを見つめて静かに待つ。

茂みを掻き分けて東洋系の女が後を追ってきた。

「どうしたの」

「しっ」

彼、は、人差し指を立てて首を振った。女を目で促す。女は一寸離れた所に少年の姿を確認する。

「話すことはできないんだよね」

少し寂しそうに、そう小さく呟いて、少年は右手を緑色の葉っぱに近付けた。

でも、触らない。

少年は俯いた。そして、もう一度遠慮がちに、その右手を緑色の葉の表面に近付けて、薬指の先を、ちょん、と一瞬触れさせた。

少年は小さく含羞んだ。

「見て」

少年は、まるで目の前の大きな植物に見せるように、両腕を広げて自分の胸を開いた。ぐいと体を反らせる。

「僕も多分君と同じ体だよ」

少年は植物を見上げた。

「でも動ける」

少年はそう言って、よく外人が何かを伝える時にする、両手を上に広げて肩を竦める、あの仕草をした。

僕達は、少年のその姿を離れた所から見つめる。

少年は姿勢を元に戻した。褐色の肌が美しい。少年は、着ている服の袖を捲った自分の左腕の肌を、何かを確かめるように愛おしむように、右手で撫でる。

「不思議だよ」

少年は俯く。

「僕たちは」

そして少年は問い掛けた。

「僕たちは一体何だろう」

モンステラ（後書き）

１ｓｔ．ミニアルバム「４」
２０１１．７月２０日発売　￥１０００

１：ｔｈｅ　Ｅｎｄ
２：セブン　レブン
３：愛と自由のブルース
４：インターネットでダウンロードしてください
５：カーナビはいらない

楽曲のｙｏｕｔｕｂｅ試聴、開始しました。

僕は君の心に迷い込む
ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｙｏｕｔｕｂｅ．ｃｏｍ／ｕｓｅｒ／ｂｅｔｏ７ｌｏｖｅ

かげ

「ひかり！」

「もっとみぎ」

「それだとはんぶんだな」

「もうちょっと」

「はんぶん？」

「そう。はんぶん」

「そこでいいわ」

「ひかりがあればできるよー」

「ほら、できたじゃん」

「きれいなかげ」

「やみ」

「やみ？」

「やみ」

「くらいことだよ」

「くらいの？」

「やみがないとできないんだって」

「くらいがやみなの？」

「あ」

「ここだ」

「そう。ぼくたちが今いるここがやみ」

「かびんは」

「まんなか」

「ひかりとやみのまんなかだよ」

「かげができた」

「まどぎわ」

「きれいにさくのよ」

「でも」

「ん？」

「どこにだってあるじゃん」

「なにがー？」

「ひかりとくらやみ」

「そういえば」

「ん」

「ひかりとくらやみのないばしょなんて」

「あるかしら」

「どうだろう」

「うーん…」

「…」

「そんなとこないよー」

「え？」

「みんないるんだもん」

「いる」

「そう」

「じゃあ」

「いるってことは…」

かげ（後書き）

１ｓｔ．ミニアルバム「４」
２０１１．７月２０日発売　￥１０００

１：ｔｈｅ　Ｅｎｄ
２：セブン　レブン
３：愛と自由のブルース
４：インターネットでダウンロードしてください
５：カーナビはいらない

楽曲のｙｏｕｔｕｂｅ試聴、開始しました。

すべての歌に、謎がある。

ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｙｏｕｔｕｂｅ．ｃｏｍ／ｕｓｅｒ／ｂｅｔｏ７ｌｏｖｅ

顔

そいつは最初、いけ好かない感じがした。

高校一年の頃だ。

引っ込み思案でなかなかクラスに溶け込めない僕とは対照的に、そいつは春の新学期、生来の明るさと気さくさと要領の良さで、初日から周囲に馴染みきっていた。

そいつは少し不良っぽい要素も入っていたから、真面目な方の側にいるつもりだった僕がそいつと深く関わることなんて、卒業まで無いと思っていた。

だが、すぐに関わるきっかけは生まれる。

そいつと僕は偶然にも、家が近所だったのだ。

バスや地下鉄、公共交通機関で登下校をする限り、顔を合わさざるを得ない。僕達は、会えば言葉を交わす程度の間柄、になった。

だがそれ以上に僕達を近づけたものがある。擽ったい言い方になるが、それは、文化、だった。

国語の授業で宮沢賢治の詩が出てきた時だ。雨ニモ負ケズ。

詩を、勉強として定型通りに解釈するなんて、馬鹿な奴のやることだと思っていた僕は、授業を無視して、教科書の空白部分にサキノハカの一節を落書きしていた。

「革命はやがてやってくる」

「あ」

「好きなのか、宮沢賢治」

「いや、好きっていうか」

「僕は好きだ」

「そうか」

「お前も好きなんだろう」

「ん。まあ」

「どんなところが」

「うん」

「何」

「優しいところ、かな」

「優しい」

「うん」

「優しい、か」

「ん」

「ふーん…」

「何だよ」

「は。お前変な奴だね」

「変かな」

「宮沢賢治を優しいって言う奴なかなかいないでしょう」

「普通は」

「うーん。厳しいとか、暗いとか冷たいだとか」

「そうなんだ」

「そうだよ」

その時そいつはとても良い顔で笑った。
今の僕には到底真似できない、七月の太陽みたいな、屈託のない笑顔だった。

それから僕達は、ピカソについて語った。手塚治虫について語った。岩井俊二について語った。ゲバラについて語った。カートコバーンの自殺に衝撃を受けた。複製羊ドリーの誕生と人類の未来について語った。エヴァンゲリオンの最終回について語った。司馬が死んだ。黒澤が死んだ。ブルーハーブのラップに魂を奮い起こされた。９．１１には現実感がなかった。

僕達は流れるように月日を過ごした。その関係は大人になっても続いた。僕達の付き合いは、いつしか互いの生きた時間の半分を越えていた。

そいつが今、目の前に、横たわっている。

白い布切れを顔に載せられて、寝台の上にその少し大きな身体を、静かに横たえている。シャンプーでもするのだろうか。

狭い室内は、妙に無機質に青光りしていて、何だか落ち着かない。後ろから足音が響いた。

「最後の顔を、見てやってください」

最後。何の。

僕は歩み寄った。

そうだよ。キン肉マンの最終回は結局見れなかったよ。僕が見たのはグレートとタッグを組んだ後くらいまでだ。ネプチューンマンが強かったんだ。

頬骨の皺が目立つ年配の女が、白い布を両手で静かに浮かせた。

その下から現れた顔を僕は見た。

フランケンだ。

僕は思った。

縫い目がある。

好奇心に駆られて寝台に近付き、僕は、その生々しい縫い目に指先をそっと触れさせた。

無理矢理縫い合わされた顔面の皮膚が、よじれてちょっと面白い引き攣り方をしている。

「ふふ」

少し愉快な気持ちが湧き上がり、僕は小さく笑った。皮膚が冷たい。まるで冷蔵庫から出したばかりの、ビニール包装されたハムみたいだ。

「長い間。仲良くしてやってくれて」

年配の女が、肩を激しく震わせた。白い布切れをきつく握り締める。声を詰まらせる。

「ありがとうね」

女は泣き崩れた。

狭い室内に小さく嗚咽が響いた。

どうして泣いているんだ、この女。

僕は構わず、寝台の上に横たわった男の顔を、真上から覗き込んだ。

風が通り抜けた。

不意に懐かしい感覚に僕は包まれた。縫い合わされた皮膚の奇妙な面構えの中に、見慣れた表情を見た。

―じゃあ―

―うん―

―死んだらどうなるの―

―目が覚めるだけさ―

―目が覚める？―

―単に今とは違うところで目が覚めるだけ。命っていうのは自分じゃないんだよ―

胸の奥で、何かが小さく砕け散る音がした。

噴き出した。

飲み込まれた。
正体不明の巨大な感情の波に全身を飲み込まれた。視界が潤んだ。
頭の中が真っ白になった。

「ああ」

僕は、笑った気がした。

気が付くと、白衣を着た看護師たちに全身を押さえ付けられていた。
女が僕を見ている。驚愕と憐れみの混じった瞳だ。

「大丈夫ですよー。落ち着いて」

看護師たちが僕を激しく揺さぶった。畜生、何を見てる。怒りが込み上げた。僕は平気だよ。僕は正気だ。僕は正気だ。僕は正気だ。

「ごはんですよがたべたい」

「はい大丈夫ですよー」

「ごはんですよがたべたいごはんですよがたべたい」

「ゆっくり深呼吸しましょうねー」

「ごはんですよがたべたいの！！」

僕は意識を失った。

顔（後書き）

１ｓｔ．ミニアルバム「４」
２０１１．７月２０日発売　￥１０００

１：ｔｈｅ　Ｅｎｄ
２：セブン　レブン
３：愛と自由のブルース
４：インターネットでダウンロードしてください
５：カーナビはいらない

楽曲のｙｏｕｔｕｂｅ試聴、開始しました。

すべての歌に、謎がある。

ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｙｏｕｔｕｂｅ．ｃｏｍ／ｕｓｅｒ／ｂｅｔｏ７ｌｏｖｅ

150km

「その通りです。僕はネクサスのリコールを」

「だがそれは無理なんだよ」

男は言葉を被せてきた。若者は、昂りかけた熱を出鼻で封じられた形になって一瞬、沈黙する。

すでに廃棄された巨大なベルトコンベアだ。

それを背後に、赤錆びた高い監視台の上で若者は、かつて上司だった男と対峙する。

いとも簡単に答えてみせた男の態度に対して、不意に怒りが込み上げる。込み上げた憤りが、歪んだ笑みとなって顔に出た。若者は追う。

「でも必要でしょう」

「必要もない」

男は明確な口調で断定した。

若者は男の目を見つめた。裏側にある本意を捉えようと、男の瞳の奥をじっと覗き込んだ。

「欠陥が原因による事故は起きないと？」

若者の問いに対して、男は、若者の目を見つめたまま視点を少しだけ下にやって、答えた。

「瑕疵は認める。だがその症状が顕在化する可能性は極めて低い。それが会社の結論だ」

「嘘です」

若者は、男の目線が微かに下に揺れたのを見逃さなかった。

「嘘ではない」

男は語気を強めた。

「専務。あなたは本当はそんな風に思ってはいないはずです」

若者は、身体の内側に昂ぶり出した熱をゆっくりと落ち着いて吐き出すように、声を落として、静かにそう言った。

「会社は正しいよ」

「僕は知っています」

「何をだね」

二人の足元に西日が差し込んだ。若者は言う。

「あなたは命懸けで奔走していた」

男は目を見開いた。

「ネクサスのリコールを会社に認めさせる為に」

ハンドルを握る。手首の血管が浮き出している。

浮き出したその血管が、弾け切れそうなほど、強く、きつく、ハンドルを握り締める。車体が軋む。１５０ｋｍ。バックミラーを覗く。光に目を細める。黒のハイエースが同じ速さで追い掛けてくる。

「もっとスピード。奴らに捕まったら終わりよ。絶対に逃げ切りなさい」

ハンドルを左にきる。タイヤが路面を激しく切り裂く。軽自動車をかわしてさらにアクセルを踏む。

車の多い平日昼の環状通だ。車は、可能な限りのフルスピードで駆ける。

「左に曲がって」

ハンドルを大きく左に。アクセルは緩めるだけだ。車体が大きく回転する。きつい圧がかかり、身体が激しく右に振り出される。二人の身体が横向きに跳ねた。フロントの景色が目まぐるしく流れる。正面に車。左折対向車のぎりぎりを掠めて、車体は右車線に収まった。

大きく息をつく。

「まずいわ」

顔を上げる。バックミラーを覗く。ハイエースが接近している。フルスモーク。車体を完全に確認できる距離だ。

「とばして」

「はい」

「何とか言ってください。専務」

男は答えない。

「正直に話してくれるのではなかったんですか」

男はきつく目を閉じて、沈黙する。目尻に刻まれた深い皺に激しい葛藤が顕れている。

「本当に」

若者は声を穏やかなものに変えて、言った。

「人々に本当に必要とされる美しい自動車を世の中に送り出すこと」

男の真っ正面に向き合っていた若者は、男から視線を外して振り返った。そして、背後のベルトコンベアをもう一度眺めた。

「兄貴の口癖です」

若者は男に背中を向けて、落下防止用の手摺りに身を委ねる。そして、コンベアの作業ラインを順番に眺めながら、男の視界の右側に移動した。

若者は、男に背を向けたまま、問い掛けた。

「あなたの台詞でしょう」

男の返答はない。

不意に込み上げるものがあった。若者は気持ちを抑え込むように皮肉に笑った。

「兄貴だって」

「必要だ」

「専務」

若者は振り返った。

男が目を開いた。

「分かってるさ。リコールは必要だ」

そして、体の内部に充満した何か悪いものを押さえ付けようとでもするかのように、吸い込んだ息を止めたまま、静かにそう言った。

「だったら」

「だが」

「専務」

若者は上司を見つめた。その眼差しに、縋るような熱を込める。
男の表情は変わらない。

「会社とは、意志を持った一つの人格でなければならない」

「何を」

若者は、男の発言の意図を図りかねて、一瞬、探るような目を見せた。
男は続ける。

「変えることができないのなら、全うしなくてはならない」

意図に気付いた若者は、語気を高めて男に詰め寄った。

「専務」

男は静かに一呼吸置いてはっきりと宣告した。

「それが私の結論だ」

１５０ｋｍ（後書き）

１ｓｔ．ミニアルバム　「４」
２０１１．７月２０日発売　￥１０００

１：ｔｈｅ　Ｅｎｄ
２：セブン　レブン
３：愛と自由のブルース
４：インターネットでダウンロードしてください
５：カーナビはいらない

楽曲のｙｏｕｔｕｂｅ試聴、開始しました。

すべての歌に、謎がある。

ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｙｏｕｔｕｂｅ．ｃｏｍ／ｕｓｅｒ／ｂｅｔｏ７ｌｏｖｅ

ノート

―窓の外を見て欲しい。
どうだろう。今日も星達はあなたの庭を飛び回っているだろうか。
地球の生態系についての考察―

また。この夢か。

暗闇だ。
ランプの淡い光。
僕は。いや、彼、は、文字を読んでいる。橙色の光がノートを黄色く照らし出す。

―ここの生態系に足を踏み入れて、まず最初に抱く違和感がある。
何か。それは星が一匹も見られないことだ―

星、が、一匹も。
その意味が僕には分からない。だが、その文字を僕は読める。アラビア文字のような奇妙な文字。

一言わずもがなだが、我々元人にとって、星から得られる光のエネルギーは基本的な生存において、絶対に欠くことのできない要素だ。
我々元人はそれを、大気中を飛び回るあらゆる種類の星達から与えられ、それを光合成することによって、生きている一

元人。
大気中を飛び回る星。
文意を掴めない。
だがそれでも、僕は鈍い意識のまま、目で文字を追う。

一だがここには星は一匹もいない。水辺の岩陰を見ても、軒先を見ても、トマリシダの裏側を見ても、どこにも、いない。
当然の話だ。空を見上げればそこには、知識を遥かに超えた巨大な

恒星があるのだから―

彼、は頷く。
特に何かに気に留める風もなく、けれども深く納得して、先を読み進む。

僕は。

戸惑う。

元人。大気中を飛び回る星たち。光合成。巨大な恒星。

その意味が。

―そしてそれに纏わる話として、驚くべき事実がある。それは。

光合成生物はすべて地に固定している、ということだ―

僕は、理解を試みる。
微かに黴臭い匂いが鼻をつく。おそらく書物の匂いだ。

―どういうことか、と思われる方もいるだろう。

つまり。

光合成によって生きる生物群のすべてが、土に根を張った静物のような存在として、あたかも海や空のようにそこに在るということだ―

光合成をする生物。

土に根を張る。当然だ。

だってそれが。

―ここでは、光合成をして生きる生物一般を指して使う呼び名がある。

「植物」

「植」えられた「物」、と書いて、植物だ。

光合成をして生きる生物は土に植わっているものだ、という認識がここでは一般的なのだ―

光合成をする、生物。

彼らは、人間ではないということなのか。

いや、人間ではあるが

―だが、我々は動く。

当然だ。そうでなければ飛び回る星たちから光エネルギーを得ることができない。

このことから導き出される一つの推論がある―

そういえば。

巨大な恒星。

確か太陽は恒星ではなかったか。

―そう。それは、光エネルギーを自ら発することのできる唯一のものである恒星、その在り方こそが、そこで生きる生物の機動性に深く関わっているということだ―

つまりこの連中は。

太陽を持たない環境の中で

彼、はノートを閉じた。

その後深く溜息をついて、ランプの光の滲む暗闇を睨んだ。そして、自分の想いに沈むように静かに目を細めた。

ノート（後書き）

１ｓｔ．ミニアルバム　「４」
２０１１．７月２０日発売　￥１０００

１：ｔｈｅ　Ｅｎｄ
２：セブン　レブン
３：愛と自由のブルース
４：インターネットでダウンロードしてください
５：カーナビはいらない

楽曲のｙｏｕｔｕｂｅ試聴、開始しました。

すべての歌に、謎がある。

ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｙｏｕｔｕｂｅ．ｃｏｍ／ｕｓｅｒ／ｂｅｔｏ７ｌｏｖｅ

乱れ

「ＧＨ区域、確認」

「ＧＨ区域、異常なし」

「ＨＩ区域、確認」

「ＨＩ区域、異常なし」

「ＩＪ区域、確認」

「ＩＪ区域、異常なし」

「ＪＫ区域、確認」

「ＪＫ区域、異常なし」

「ＫＬ区域、確認」

「ＫＬ区域、異常なし」

「ＬＭ区域、確認」

「ＬＭ区域、異常なし」

「ＭＮ区域、確認」

「ＭＮ区域、異常なし」

「ＮＯ区域、確認」

「ＮＯ区域、異常なし」

「何だ」

「ＯＰ区域

「あ？いや、ＮＯ区域、ちょっと待ってください」

「今、回線に一瞬、乱れが」

「乱れ？」

「は。ＵＦＯだぜ、きっと」

「ふざけるな」

「有効範囲を狭めてサーチしてみろ」

「やってます」

「どうだ」

「…」

「何も反応しないぞ」

「…」

「気のせいだろう」

「…」

「あ」

「…」

「聞いたか」

「何かありますね」

「フォーカスします」

「ＮＯの１２の３１だ」

……ん……こ……す……

「声だ」

「マジでＵＦＯか」

「音声にコンプレッサーをかけろ」

……んせ……うきこ……す……

「限界までだ」

……んせ…とうきこ…ますか…

「んせ…とうきこ…ますか…」

「んせとう」

「きこ…ますか」

「管制塔聞こえますか」

「日本語だ」

「本当に回線は合ってるのか」

「合っています。モニターに故障がないなら」

…き…えますか……ｉｓ……ａｒｂｌｅ……

「今、何と言った」

「英語です」

…きこ……すか…ｉｓ……ａｒｂｌｅ……

「ａｒ…ｂ」

「Ｆａｒｂｌｅ」

「塔長」

…きこ…ますか…Ｔｈｉｓ…ｉｓ…Ｆａｒｂｌｅ……

「無事なのか」

「全員、サーチをＮＯの１２の３１に合わせてください」

「Ｆａｒｂｌｅだ！」

「無事だったんだ」

「信じられん！」

「塔長」

「何故ファーブルがこんな所にいるんだ」

乱れ（後書き）

１ｓｔ．ミニアルバム　「４」
２０１１．７月２０日発売　￥１０００

１：ｔｈｅ　Ｅｎｄ
２：セブン　レブン
３：愛と自由のブルース
４：インターネットでダウンロードしてください
５：カーナビはいらない

楽曲のｙｏｕｔｕｂｅ試聴、開始しました。

すべての歌に、謎がある。

ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｙｏｕｔｕｂｅ．ｃｏｍ／ｕｓｅｒ／ｂｅｔｏ７ｌｏｖｅ

ゆうひ

「あのいろはなに」

「んー」

「だいだいいろ！」

「えー」

「だめ？」

「もっと」

「うん。もっともえてるよ」

「あか」

「そのくらい」

「でも」

「なに」

「あの、よるがはじまってきてるところ」

「ほんとだ！さかいめ」

「ピンクでしょう」

「ピンクだ」

「ゆうひ、すきだ」

「うん」

「きらきらのうみ」

「きれいだね」

「きれいだよ」

「なぜ」

「なぜ？」

「どうして、きれいって思うのかしら」

「んー」

「きらきらしてるから」

「いいいろだからだよー」

「じゃなくてじゃなくて。わたしたちが」

「わたしたちが？」

「そう」

「んー？」

「どうしてああいういろのをきれいだってかんじるのかな」

「ああいういろ？」

「どんないろだって」

「うん」

「ぜんぶいっしょでしょう」

「ぜんぶちがうよー」

「そう。ちがうだけ」

「ちがうだけ？」

「ちがうだけなのに」

「やっぱり」

「きれいだ」

「みてるとむねがぽかぽかするよ」

「しょうがないさ」

「ん」

「すきになるんだ。ぼくたちは、あのいろを」

ゆうひ（後書き）

１ｓｔ．ミニアルバム「４」
２０１１．７月２０日発売　￥１０００

１：ｔｈｅ　Ｅｎｄ
２：セブン　レブン
３：愛と自由のブルース
４：インターネットでダウンロードしてください
５：カーナビはいらない

楽曲のｙｏｕｔｕｂｅ試聴、開始しました。

すべての歌に、謎がある。

ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｙｏｕｔｕｂｅ．ｃｏｍ／ｕｓｅｒ／ｂｅｔｏ７ｌｏｖｅ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1676v/

終わりのないカルテット

2011年10月12日08時57分発行